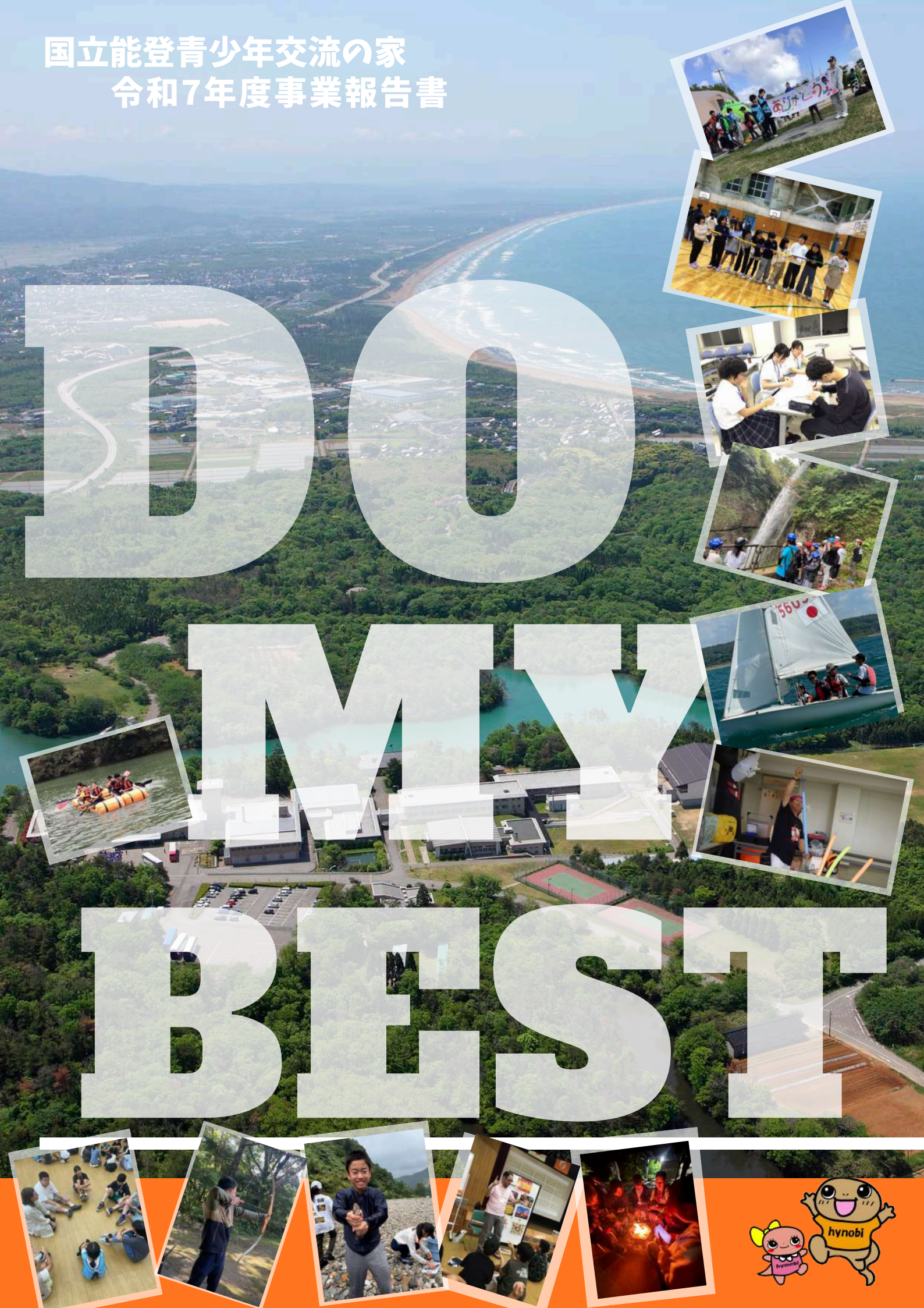
国立能登青少年交流の家
令和7年度事業報告書



目　次

□巻頭言
協力すれば仲良くなれる　～「家」教育の機能の本質とは～ ・・・・・・・・・・・・・・・・・1

□石川県×国能青　がんばろう能登っ子　自然体験
リフレッシュ GW キャンプ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
リフレッシュ 夏 キャンプ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
リフレッシュ 秋 キャンプ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
リフレッシュ 冬 キャンプ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

□全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」
オリエンテーション合宿 in 能登（公募型）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
羽咋高校地域探究トライアルキャンプ（学校型）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
能登ステージ 高校生交流会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

□課題を抱える青少年を支援する体験活動
NOTO　Summer　camp・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

□「親子でつくろう体験の和」実行委員会事業
ファミリーキャンプ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
Smile Festival in NOTO・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

□羽咋市教育委員会連携事業・「親子でつくろう体験の和」実行委員会事業
HAKUI キッズイングリッシュキャンプ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
ヒノビィと一緒　通学合宿～仲間と一緒に生活習慣と学習習慣を身に付けよう～・・・・・・・・・・29

□青少年教育指導者等の養成及び資質向上に関する事業
のとボラ養成セミナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
NEAL インストラクター養成事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
ボランティア自主企画事業支援プロジェクト～　～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

□参考資料
令和７年度 能登青少年交流の家 利用状況

□おわりに

国立能登青少年交流の家
マスコットキャラクター
「ヒノビィファミリー」

協力すれば仲良くなれる！　～「家」の教育機能の本質とは～

はじめに～続く冬の時代から

本年度は大きな区切りの年でした。まず大きなこととして第 4 期中期目標・計画期間が終了したことです。本期間の評価は主管の文科省はじめ総務省、財務省から厳しい評価を受けました。この評価に基づいた新年度からはじまる第 5 期中期目標・計画は施設そのものの統廃合計画の策定、管理運営予算の自己収入割合の大幅な増、研修支援事業、教育事業のさらなる改革をめざすものになっています。まさに求められる多くのものを、減少した予算と人員でどう対応していくのか？そのことが来年度からの勝負になります。

いまこそ施設運営は知恵と工夫、そして最も大切な施設の現場を守る「信念」」と多くの団体、機関との「連携」が必要になっています。

いま、大切なことは「選択と集中」です。特に、当所の「つよみ」を改めて見つめ直し、「つよみ」をさらに強固にしていくことだと思っています。「つよみ」こそ当所の長年の経緯と地域課題と連携が創り出してきたものです。また「つよみ」は得意ですので、非常に豊かにそして新たな発想を生み出しながら、さらに効率的なパフォーマンスで大きな成果を上げることが可能です。

そのために、本報告書は当所の「つよみ」を改めて認識する重要なものであると思います。

そして、当所は本年度、何を学び、その学びを活かして、今後、何を大切な軸としていくのか？この考察も必要であると考えます。すなわち「バトン」は何か？そのことを引き継ぐのが本報告書の役割であると考えています。

そこで、以下の項目について整理し、本年度の報告書の巻頭としたいと思います。

特に、⑴では「リフレッシュキャンプ」」の継続のなかで学ぶことのできた私達の「家」という施設の教育機能の本質といま求められる支援のあり方を体系的に整理します。

⑴　【考察】 協力すれば仲良くなれる～「家」の教育機能の本質とは？～
⑵　本年度を振り返る①「能登半島地震の対応～新たなリフレッシュキャンプの取組」
⑶　本年度を振り返る②「研修支援の充実～改善と課題」

Ⅰ【考察】　協力すれば仲良くなれる～「家」の教育機能の本質とは？～

能登半島地震から 2 年間、当所は被災した能登地区の児童、生徒を対象に「リフレッシキャンプ」を継続して取り組んできました。その中でとても印象に残ったアンケートが 2 枚ありました。1 枚目にはたった 1 行、鉛筆で「きょうりょくすれば仲良くなれる」と子供らしい字で書いてありました。2 枚目も同じ小学5年生でした。「ここでは自分のいいところ、好きな自分を引き出してくれる。」と書かれていました。

私はこの 2 枚に深い感動を覚えました。なぜならこの2つの言葉こそ、「家」という施設がこの時代の中で大切にしなければならない事を明確に教示してくれているのです。国立青少年教育施設めざす重要なミッションは**「体験活動を通じた青少年の自立」**です。ここに大切な本質があります。

「小さな成功体験」の場と機会がファーストステップに

それでは私達の役割は「自立支援」のなかでどのような位置づけになるのか。私は長年の施設の現場で多くの子供たちと出会う中で考えてきました。そして「リフレッシュキャンプ」の中での子供たちの変容と声から青少年教育施設における「自立支援モデル図」を描くことができました。

すなわち**「体験活動＋人間関係づくり」こそ**が、私達の施設での自立支援の基軸であるということです。換言すれば体験活動にチャレンジするプロセスが「自己効力感」（小さな成功体験）、を高め、そのチャレンジを仲間としていくストーリーの中でのプロセスで獲得する「自己有用感」（人間関係づくりの成功体験）が自己肯定感を高めるだけではなく、自己決定力、さらにレジリエンス力を高めることにつながるという支援フローです。この連関が青少年の自立のステップとなるのです。

【青少年自立ステップ・フロー】

自己効力感・自己有用感

⇓

自己肯定感（自分らしさの肯定）

⇓

自己決定力・レジリエンス

「協働体験」が子供たちの高い満足度につながっている（青少年教育研究センターの分析研究）

上記の重要性は研究からも明らかになりました。当機構の青少年研究センターが「リフレッシュキャンプ」のアンケート分析を行いました。明らかになったことは「アンケートの満足度の高さはどのような活動によって高められたか？」ということです。**明確になったことは「協働体験」でした。**まさに「協力しながら体験できたこと」すなわち「協力すれば仲良くなれる」体験こそが子供たちの心に残っていて「楽しかった」「来てよかった」「また来たい」という**前向きな気持ちとして表現されていることがわかりました。**

「安心感」があるから「ゆらぎ」が生まれる

しかし、上記のステップを誰もが着実に踏める訳ではありません。そのために不可欠であるのが「そばにいる大人」の存在です。施設では職員であり、ボランティアの存在です。参加者は不安と緊張と怖さを持って非日常である施設にやってきます。

「リフレッシュキャンプ」の参加者の中には玄関に入れない子供も時にはいました。また、地震の怖さから眠れなかったり、暗闇や浴室を怖がったりする参加者もいました。

【自立・三間ステップ支援フロー】

出会い：不安を安心・期待へ変える

⇓

活　動：達成感を自信・成長に変える

⇓

旅立ち：可能性を未来へつなげる

その不安と緊張を受け止め、「安心感」を与え、期待に変える。

ここに支援者である施設職員の専門的な支援スキル（ユースワーク）が求められます。また、学生を中心にしたボランティアの「ナナメの関係」の存在が大切であります。この「安心感」があるからこそ参加した子供たち　は新しい人間関係、体験活動に一歩踏み出すのです。まさに不安からのチャレンジへの転換が参加者の固い心に「ゆらぎ」を創り出し、成長と変容のステップがスタートし、様々なプロセスの段階（三間：出会い・プログラム・旅立ち<別れ>）での職員・ボランティアの支援を受け、参加者は主体的に自立のステップを着実に踏んで行くのです。**まさに「安心感」づくりは自立を支援する私達の施設での最重要なKEYWORDであるのです。**

「家」だからこそできる「体験活動＋人間関係づくり」を強みにして取り組む

いま能登は震災から 2 年。兵庫県教委の調査では阪神淡路大震災発生後、**3 年目に教育相談件数が最も多かったと報告**されており、東日本大震災でも類似の傾向がみられたといわれています。さらに令和 7 年の小中高校生の自殺者数が 538 人と令和 6 年の最高値を 9 人上回っています。

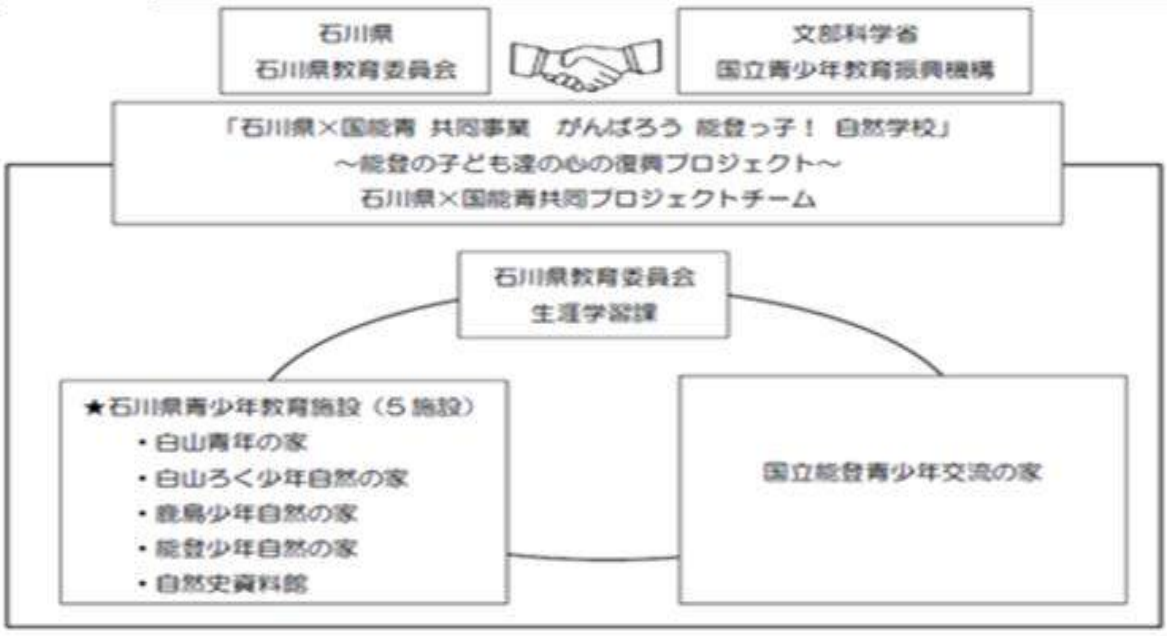
このような厳しい現状の中で私達の「家」は何を大切に事業に取り組むことが必要なのでしょうか？「事業をやる」ことも大切ですが、その事業の「中身」、いわゆる「目的と手段」を明確にし、「自立支援ステップ・フロー」を踏まえた、「三間ステップ支援フロー」を施設職員の専門性を活かして、ボランティアとともに、「協力すれば仲良くなれる」チャレンジプロセスを応援し、子供たちの主体性を引き出し、自立とレジリエンスの獲得を支援することが私達の施設の「家」の使命であると思います。

このような独自性ある教育機能を教育事業ばかりでなく、研修支援事業にも展開し、現代の青少年の課題に向き合い、対応していくことが施設の役割を果たしていくことが、いま施設に求められており、私達の存在意義を高めていくことにつながると考えています。

2　本年度を振り返る①

「能登半島地震の対応～新たなリフレッシュキャンプの取組」

令和 6 年 1 月下旬から取組を実施した「リフレッシュキャンプ」事業は令和 6 年度において本部より予算を配分頂き継続して、当所が主催して 14 回（延 20 泊）延 640 名の奥能登、中能登、内灘地区の児童、生徒が参加しました。しかし、令和 7 年度においては予算が厳しい状況のなかで本部に要求しましたが立ち止まりました。そのような中で当所の職員から外部資金を集めてでも「所長、是非やりましょう」という声が上がりました。そのことを聴いた当機構の古川理事長が石川県庁の馳知事（当時）に直談判を行い、予算を機構と県で併せて、国と石川県は連携して「リフレッシュキャンプ」を実施する先例のない新たな「プロジェクト」が立ち上がりました。（下記図参照）



「プロジェクト」のスタート時には国立施設と県立施設の考え方など、いわゆるカルチャーの相違から意見が合わず、スムーズとは言い難い運営になりましたが、本事業のプログラムを重ねるごとに、施設の違いを超えた協働が相互の信頼関係を築き、互いの理解が進み、また当所の法人ボランティアの熱意ある活躍もあり、年 4 回のキャンプを実施（延べ9泊）し、延べ 500 名の児童、生徒がシーズンに合わせた県内の様々な豊かな自然や地域フィールドのある施設で石川県であるからこその特色あるプログラムを楽しみながらリフレッシュすることができました。まさに、「リフレッシュキャンプ」は点から面には発展したのです。
（各事業の詳細は本報告書参照）

「笑顔プロジェクト」の展開

また、上記とともに「笑顔プロジェクト」として実施してきた奥能登地区へのアウトリーチ事業「笑顔のキャラバン隊」も継続し、七尾市立中島小学校では親子レクリエーションを行い、親子 100 名が参加、能登町立小学校7校の 6 年生児童を対象に「中 1 ギャップ対応」としての交流レクリエーションを実施し 50 名が参加しました。

ボランティアの受入

さらに、令和 7 年度の震災対応のボランティアの受入では 8 大学から延べ 380 名の学生ボランティアが当所に宿泊し、能登での復興ボランティアに取り組みました。

民間団体との連携と支援

また、宮城県気仙沼市にある一般社団法人「まるオフィス」とは震災後より連携し、東日本大震災を経験した学生ボランティアの派遣につながることができました。そして「まるオフィス」が主催した輪島市の高校生と気仙沼市の高校生との交流、さらに被災地でのワークキャンプ（合宿型ボランティア）の展開をしました。このような事業の支援を当所は継続して行い、まさに「震災と震災をつなぐ」取組を行いました。

震災だからこそのつながりと恩返し

このような取組の中で、大変にうれしいこともありました。震災で被災し当所に避難した学校や団体との、その後のつながりです。特に、石川県立田鶴浜高校は看護科、福祉科のスペシャリストを養成しています。高校の寮が被災して半年にわたり寮で暮らす生徒たちは当施設から学校に通いました。 このつながりで当所の 10 月に行われる「スマイルフェスティバル」に毎年、高校生によるハンドマッサージや様々な体験ができるブースを出展してくれています。その中でメディアの取材に応えた生徒はこう話しました。「震災のときに能登青少年交流の家が受け入れてくれたから勉強を続けられた、その恩返しがしたい。」、田鶴浜高校の赤島校長先生も私も感動しかありませんでした。

今後も当所は被災地のフェーズとニーズと課題を受け止めながら、復興に全力で尽力していきたいと考えています。

3　本年度を振り返る②「研修支援の充実～改善と課題」

令和 7 年度の利用者数は 3 月末現在、総利用者数 57,760 人（R6 55,453 人）、宿泊利用者数は 42,080 人（R6 42,846 人）になっています。R6 年度は震災関係もあったことを考えると利用者数は増加したと見えています。特に、下記の表にあるように各学校団体数が増加しており、中高校数の増が顕著です、さらに都市部である金沢市からの利用が年々増えていることから、今後の金沢市、そして近隣市町が広報ターゲットとみています。震災で閉館していた県立能登少年の自然の家が 7 月より、再開することにより、奥能登地区の学校は戻ると予想され、それに代わる層の開拓が求められています。

また、本年度の利用の特徴は金沢大学のサークル等の利用が増加したことです。

特筆すべきは金沢大学ヨット部が震災で、ホームであった七尾港から当所に近い境港に一時的に活動場所を移したこと、さらに近畿、北陸地区のインカレの当番校にあたったことにより、事前の練習から当日の大会まで延べ 38 泊、利用は延べ 1,300 人となりました。そして大会では延べ9大学、延 40 泊で延 1,200 人が利用しました。金沢大学ヨット部は今後、七尾港に戻る予定であることから、延べ 2,500 人の利用者の確保が当所の大きな課題となり、県内の大学への広報を強化していくことが必要になります。

【令和 6 年度・令和 7 年度の学校数、利用者数の比較】

体種別	R6 年度校数	R6 年度人数	R7年度校数	R7年度人数
小学校	63	9,600	75	10,400
※内 金沢市	24	4,590	26	4,870
中学校	3	340	6	860
高校	9	1,770	15	2,330
金大（サークル等）	6	830	9	960

研修支援業務では昨年度から「合同事前受付」による利用団体間でのプログラム調整（活動場所の調整から利用者への合同説明）から当初が利用団体の活動の目的などを考慮しながら企画指導専門職がプログラム調整をする方式に 180 度転換をしました。これにより個別の事前相談を実施してきたところです。当所は担当する職員の対応がうまくいかず、利用団体側に不満足感があり、アンケートにも低い数値が示されたが、企画指導専門職等を中心にした改善の取組が効を奏し、本年度、数値が上がる成果を示しました。

今後の研修支援事業の改善に取り組むには①教育満足度（また利用したい）②活動の教育的有効度、そして③事前相談、この①②③の数値を一連の教育的に価値がある数値（教育的意義の高い活動：学校の利用の主目的）として考え、分析し、当所の「よわみ」を見究めることが必要であると考えています。

【令和５年度～令和８年度 教育的アンケート数値の推移】

項目	R5年度	R6 年度	R7年度
教育満足度	86%	91.8%	87.2%
事前相談	77.2%	82.9%	86.3%
活動有効度	89.2%	94.1%	88.4%

※上記、3 点の平均値を揃って上げていくことが肝要である

※項目「教育満足度」はアンケートでは「リピートしたいか？」との質問項目になっている。

おわりに～地域を愛することこそ

本年度のはじめに「いかだ桟橋プロジェクト」が立ち上がりました。いかだ桟橋が経年劣化により使用不能になったのです。本部予算もなく、クラウドファンディングも検討しましたが本部担当課より施設修繕にはそぐわないと言われました。

私達は意を決して、水辺活動の一番人気である「いかだ体験」の活動を守るために、寄付金を集めることにしました。早速、北國新聞に取り上げられました。その翌日からびっくりするぐらいの反応があり、野々市から見えた女性は「昔お世話になりました、使ってください」と 10 万円をカウンターに置いていかれました。地域のロータリークラブ、そしてライオンズクラブさんから多額の寄付を頂きました。100 万円を目標にしていましたが最終的には 200 万を超える金額が集まりました。ライオンズクラブの役員の方も「中学時代に利用して、テーブルマナーをしたことが忘れられない」と懐かしそうに話すのです。

地域連携という言葉があります。それは、まさにこのことが示すように、私達施設が「どれだけ地域に貢献したか」「どれだけ地域の子供たちや若者達を愛したか」にあると思います。それがやがて育ち、私達の施設を支えてくれることを教えてくれました。

改めてこの場を借りてお礼を申し上げるとともに、このことを胸に新年度も職員が一丸となり、能登のためにがんばっていきたいと決意を表し、本稿を閉じさせていただきます。

（所長 北見 靖直）

令和7年度 石川県×国能青 共同事業 がんばろう！ 能登っ子 自然学校
リフレッシュ GW キャンプ

1　趣　旨

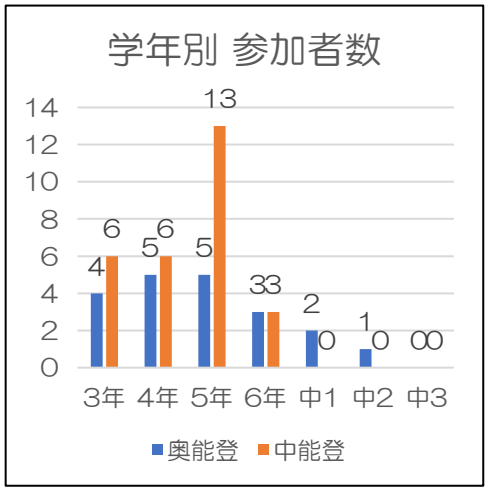
・令和6年能登半島地震により、被災した児童・生徒に自然に親しみながら活動を提供する。仲間と協力して活動することで何事にも挑戦する気持ちを高める機会とする。新年度がスタートして一カ月を経過し、リフレッシュすることができるゴールデンウィークに児童・生徒が仲間と寝食を共にすることで、仲間を思いやり、自己の成長や自分の良さに気付き、今後の生活の中で自信をもって行動できるようにする。

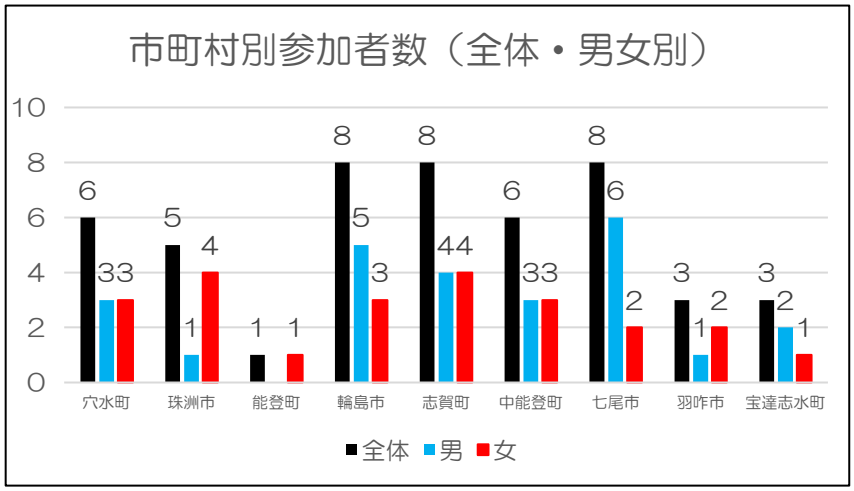
2　実施期間　令和7年5月3日（土・祝）～5日（月祝）（2泊3日）

3　参加者

（1）参加者　　能登地区在住の小学校3年生～中学校2年生　48名（申込122名　当日欠席1名）

（2）地区別参加者





4　活動内容

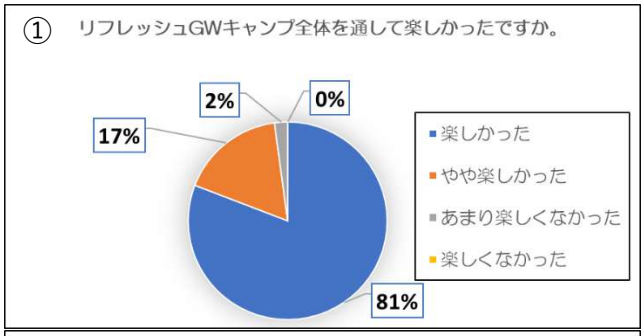
1日目　冒険チャレンジ		
7:30		Aバス　珠洲健民体育館前　発
8:30		⇒能都中学校発
8:00		Bバス　輪島ふらっと訪夢　発
9:00		⇒ＪＡのと穴水支店　発
10:30	玄関ロビー	※七尾市・中能登町・志賀町・羽咋市・宝達志水町は保護者送迎で現地集合 受付：七尾市・中能登町・志賀町・羽咋市・宝達志水町
11:00	講堂	バス着（能登青少年交流の家） 出会いのつどい・OR 仲間づくり（NOTO ジョイフレンド）
12:30	食堂	昼食
13:00	講堂	NOTO アドベンチャータイム （フードハント WR）
16:00	宿舎	NOTO ベッドメイクタイム
17:00	かんぽ広場	ゆうべのつどい
18:00	食堂	夕食
20:00	浴室	入浴
21:00	宿舎	就寝準備
21:30		就寝

2日目　山登りチャレンジ		
6:00	宿舎	起床、清掃
7:00	玄関ロビー	サイクリング　発（交流の家）
8:00	CY ターミナル	おにぎり弁当
10:00		サイクリング　着（海岸）
11:45		徒歩　着（宝達山登山口）
12:00	宝達山登山口	昼食弁当 入山
	宝達山山頂	NOTO クライミングタイム 下山
17:00	宝達山登山口	バス　発（宝達山登山口）
17:45	玄関ロビー	バス　着（交流の家）
18:00	食堂	夕食
19:00	かんぽ広場	NOTO たき火・星空タイム
20:00	浴室	入浴
21:00	宿舎	就寝準備
21:30		就寝

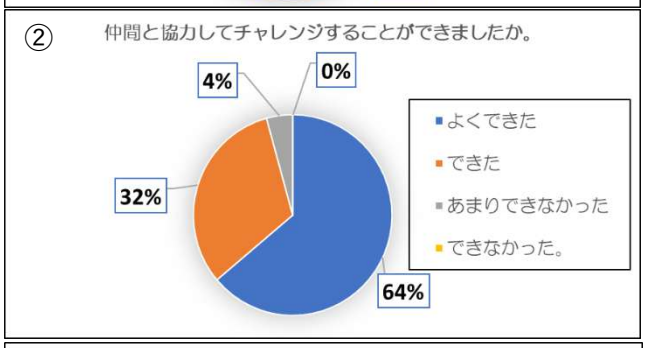
3日目　調理チャレンジ		
6:00	宿舎	起床、清掃
7:00	かんぽ広場	朝のつどい
7:30	食堂	朝食
8:40	宿舎	宿舎点検・荷物移動
9:00	野外炊事場	活動準備・説明 NOTO クッキングタイム（ピザ）
13:30	講堂	NOTO のんびりタイム
14:00	講堂	またねの会
15:00	玄関前	Aバス発（能都中学校→珠洲市健民体育館） Bバス発（JA のと穴水→ふらっと訪夢） ※七尾市・中能登町・志賀町・羽咋市・宝達志水町は保護者送迎で現地解散
17:00		Aバス　能都中学校　着
18:00		⇒珠洲健民体育館前　着
16:30		Bバス　ＪＡのと穴水支店　着
17:30		⇒輪島ふらっと訪夢　着

5 アンケート分析と参加児童の声

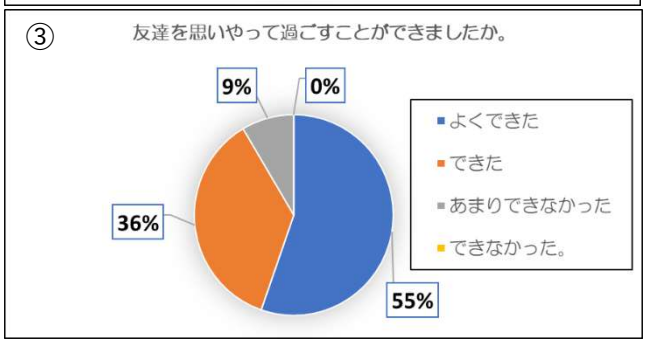
次項に示す児童アンケートでは、全質問項目で高い数値を示した。①②③は本事業に参加した全児童が肯定的に回答した。中でも②は、仲間と共にチャレンジするという本キャンプを通して、家庭で学習するよりも「やる気」を持たせたり、理解を深めたりすることにつながり、満足感・達成感を感じさせることができたと考える。また、③は、家庭では積極的に経験できないことで、友達と寝食を伴う GW キャンプであるからこそ生まれるものである。本事業を通して、協働することの大切さを学ぶことができたと考える。



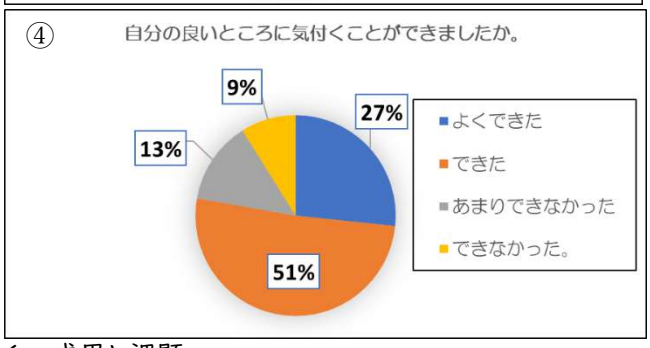
・ボランティアが楽しくさせてくれたから楽しかったし、面白かった。（中能登　小4女）
・できなかったこともあったけれど、全員で協力し合って乗り越えていったことが楽しかった。（奥能登　小4女）
・最初、行きたくなかったけど、実際に行ってみたら、案外楽しくて、また行きたくなった。（中能登　小6男）



・山へ行った時にいっぱいあきらめようと思ったけど、同じ班のみんなが応援してくれたおかげで、上へ行くことができた。（中能登　小3女）
・山登りで危ないところを伝え合ったりした。（中能登　小4女）
・特に山登りでは「頑張って」「あとちょっとだよ」とお互いに声掛けができた。（奥能登　小6女）



・友達を思いやって過ごすことができた。しかし、夜更かしを止めることができなかった。2日目は、夜更かしをせずに寝ることができた。（中能登　小5女）
・登山で遅れている人を待ってあげることができた。（中能登　小5女）
・ピザを作る時に男子の分を考えながら作ることができた。（奥能登　小3女）



・あきらめない心。（中能登　小3女）
・いろいろな人と関われたところ。（奥能登　小4男）
・友達の心配をしてあげたりするところ。（中能登　小5男）
・いろんな場面で度胸や根性があったし、友達と仲良くする力があったところ。（中能登　小5男）
・みんなをまとめられたところ（中能登　小5女）

6　成果と課題

これまでリフレッシュ GW キャンプに参加する機会の無かった児童・生徒が計48名参加することができた。はじめは恥ずかしがっていた子も、仲間とともに過ごす共同生活を通して、自分の思いを徐々に表出するようになった。本キャンプのめあてである「仲間と一緒にチャレンジできたか」という問いには、64%の参加者が肯定的回答をした。地域や学校、学年、男女関係なく仲間と関わり、共通の目標に向かって取り組む良さを実感しているといえる。また自転車に乗ることが困難な高学年児童が、宝達山登山時のゴールテープを作ろうと呼びかけ、低学年をリードするなど、大切な仲間を想い、貢献することの素晴らしさを味わっていた。上記のアンケート項目にもある「自分の良いところに気づくことができたか」は、まさに自己肯定感、自己有用感の高まりを示している。一方、「できなかった」等と回答した参加者は、自己評価が厳しく、また高い理想を持った参加者であった。

これらを踏まえ、参加者自身の変容を事業のたびにフィードバックするとともに、本キャンプの成果を他県の青少年教育施設、学校現場へも届けていきたい。

令和7年度 石川県×国能青 共同事業 がんばろう！ 能登っ子 自然学校
リフレッシュ夏キャンプ

1　趣　旨

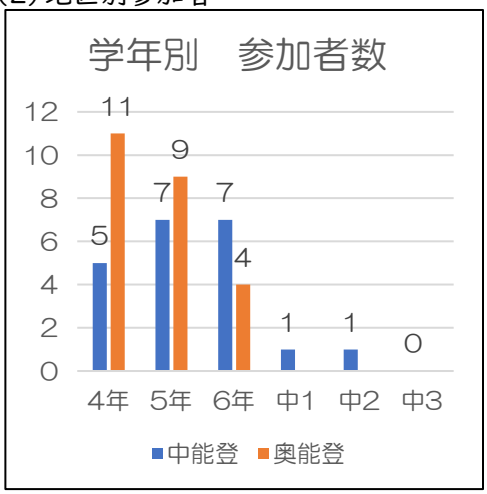
・令和6年能登半島地震により、被災した児童・生徒に夏の海や川などでの自然体験の機会を提供し、児童・生徒の心の復興を図る。
・2学期を前に、リフレッシュできる長期休業中に児童・生徒が仲間と寝食を共にすることで、仲間を思いやり、自己の成長や自分の良さに気付き、今後の生活に自信を持って生活できるようにする。

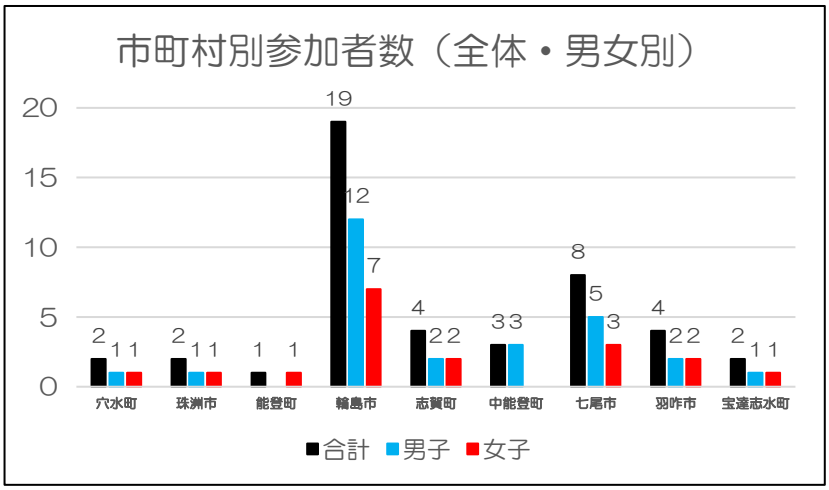
2　実施期間　　令和7年8月25日（月）～28日（木）（3泊4日）

3　参加者

（1）参加者　　能登地区在住の小学校3年生～中学校2年生　45名
（申込144名　当日欠席 1 名　2 日目からの参加 1 名）

（2）地区別参加者





4　活動内容

１日目　海チャレンジ。（国立能登青少年交流の家）	
8:00	Aバス　道の駅すずなり　発
8:45	⇒能都中学校　発
9:00	Bバス　輪島ふらっと訪夢　発
9:30	のと鉄道穴水駅前　発
10:30	※七尾市・中能登町・志賀町・羽咋市・宝達志水町在住の方は、国立能登青少年交流の家（国能青）まで送迎をお願いします。参加者の受付も国能青で行います。
10:45	バス着（国立能登青少年交流の家）
11:00	出会いのつどい・オリエンテーション 仲間づくり（NOTO ジョイフレンド）
12:30	昼食
13:00	NOTO アドベンチャータイム （砂像造り・磯遊び等）
16:00	NOTO ベッドメイクタイム
17:00	夕べのつどい
18:00	夕食
19:00	ふれあいタイム
20:00	入浴
21:00	就寝準備・翌日準備
21:30	就寝

２日目　野外炊事チャレンジ（国立能登青少年交流の家⇒石川県立白山青年の家）	
6:00	起床、清掃
7:00	朝のつどい
7:20	朝食
8:00	荷物移動
8:40	宿舎点検
9:15	NOTO クッキングタイム （夏野菜カレーライス）
13:00	NOTO のんびりタイム
14:00	たびだちの会
14:30	国立能登青少年交流の家　発 ※バス移動
16:00	石川県立白山青年の家　着 入所オリエンテーション
18:00	夕食
19:00	たき火体験
20:00	入浴 自由交流
22:00	就寝

３日目　川チャレンジ（石川県立白山青年の家）	
6:00	起床、清掃
7:00	朝のつどい
7:30	朝食・活動準備
8:30	目附谷へ出発
9:30	イワナつかみ活動
11:00	川遊び
12:15	着替え
12:30	昼食（イワナ塩焼きなど）
13:20	「白山恐竜パーク白峰」へ出発
14:00	太古の手取川について学ぶ 化石壁・化石発掘体験・館内見学
16:30	「白山恐竜パーク白峰」発
18:00	夕食
19:00	キャンプファイヤー
20:00	入浴・自由交流
22:00	就寝

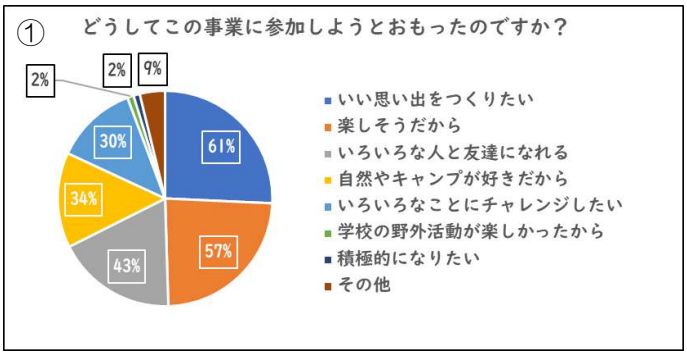
４日目　思い出共有（石川県立白山青年の家）	
6:00	起床
7:00	朝のつどい
7:30	朝食・部屋の片付け
8:40	宿舎点検・荷物移動
9:00	アンモナイトのレプリカづくり
11:30	別れのつどい
12:00	昼食
13:00	石川県立白山青年の家　発
14:30	国立能登青少年交流の家　着　トイレ休憩 ※中能登地区在住の方は、国能青へお迎えをお願いします。奥能登地区在住の方は、下記の場所までバスで送ります。現地でお迎えをお願いします。 Aバス
16:30	⇒能都中学校　着　能登町解散
17:00	⇒道の駅すずなり　着　珠洲市解散 Bバス
15:30	⇒のと鉄道穴水駅　着　穴水町解散
16:00	⇒輪島ふらっと訪夢　着　輪島市解散

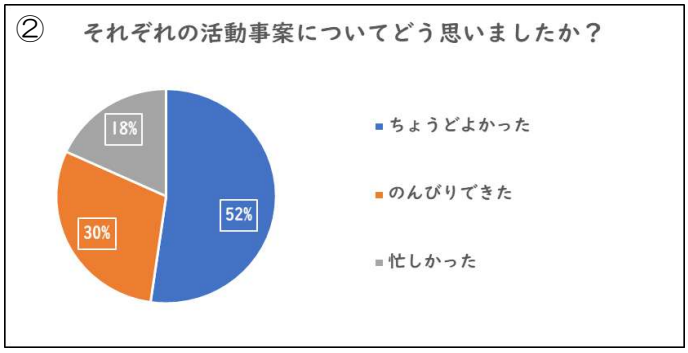
5 アンケート分析と参加した子どもたちの声

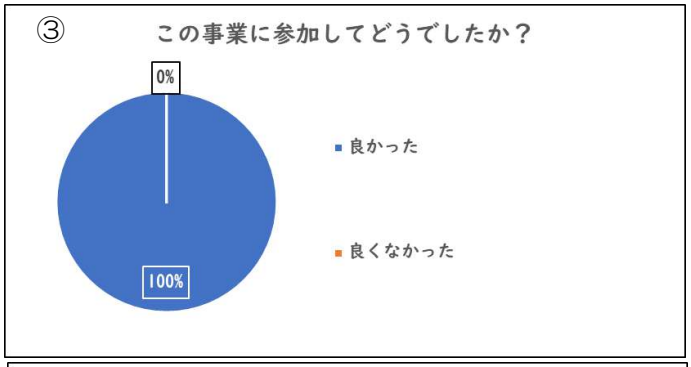
「石川県×国能青　共同事業　がんばろう！ 能登っ子　自然学校　リフレッシュ夏キャンプ」では、多くの子どもたちが「自分の意思で参加した」「楽しそうだから」「思い出を作りたい」といった前向きな気持ちで申込んでおり、意欲的な参加が窺えた。活動の時間配分についても「ちょうどよかった」と感じた児童が多く、過密すぎず適度な充実感があったといえる。

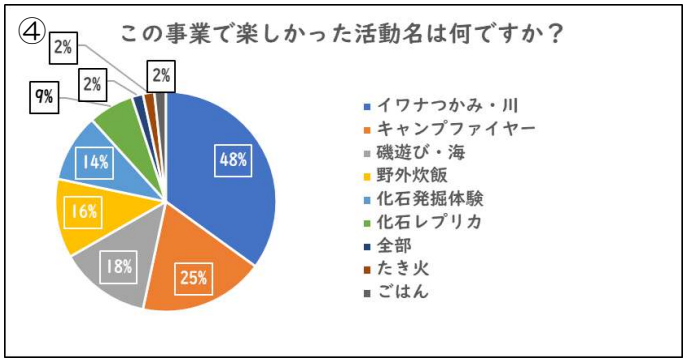
参加後の感想では、全員が「参加してよかった」と回答し、「新しい友達ができた」「協力して活動できた」「魚をさばくのに挑戦できた」「キャンプファイヤーが楽しかった」など、友達づくりや挑戦、協力ができたことへの喜びが多く語られた。初めは緊張していたが、次第に打ち解けて友達が増えたと回答した子どもたちも多かった。

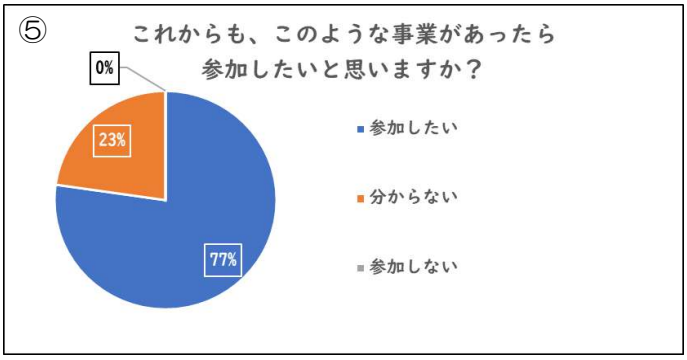
また、川遊びや化石発掘、野外炊事など普段できない体験が強く印象に残っており、「次回も参加したい」との声が数多く寄せられた。全体として、子どもたちの心は大いにリフレッシュし、今回の事業が主体性と社会性の向上に寄与する有意義なものとなったことがアンケート調査から分かった。

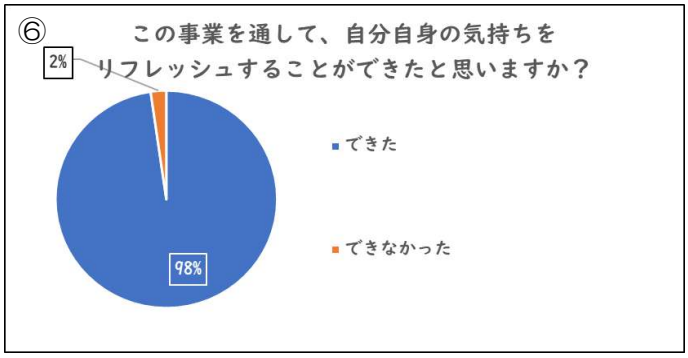












6　成果と課題

今回の「石川県×国能青　共同事業　がんばろう！ 能登っ子　自然学校　リフレッシュ夏キャンプ」は、震災後の子どもたちに安心・安全な活動と交流の場を提供することを目的として実施した。県職員と国立職員との役割分担により安全管理が徹底され、猛暑や天候の急変にも迅速に対応できたことは大きな成果であった。また、ボランティアが子どもたちに寄り添い、個々の不安に応じた声掛けや活動支援を行ったことで、子どもたちは安心して活動に取り組むことができた。

アンケート結果では、全員が「参加してよかった」と回答しており、特に「友達ができた」「チャレンジできた」「いい思い出ができた」という声が多く、子どもたちの心身のリフレッシュや今後の生活に勇気をもって臨む気持ちを育むことができ、事業として一定の成果を挙げたといえる。

一方、課題としては活動プログラムが優先され、子どもたちが自由に遊べる時間の確保ができず、仲間とゆっくり過ごす場面が少なかったことが挙げられる。今後は、自由交流の時間を意図的に取り入れ、子どもたち同士が深く関わる機会を増やすことが求められる。また、班別活動後の振り返りや共有の時間を充実させることで、交流の場が増えることにつながると考えられる。

令和7年度 石川県×国能青 共同事業 がんばろう 能登っ子！自然学校
リフレッシュ秋キャンプ

1 趣 旨

・令和6年能登半島地震により、被災した児童・生徒に自然に親しみながらの体験活動を提供する。仲間と協力して活動することで何事にも挑戦する気持ちを高める機会とする。
・夏休みを終えて一カ月を経過し、リフレッシュすることができる秋の三連休で児童・生徒が仲間と寝食を共にすることで、仲間を思いやり、自己の成長や自分の良さに気付き、今後の生活の中で自信をもって行動できるようにする。

2 実施期間 令和7年 10 月 11 日（土）～ 13 日（月・祝） 2泊3日

3 参加者

（1）参加者 小学校4年生～中学校1年生 37 名
（2）地区別参加者

4 活動内容

1日目	2日目
7:00 珠洲・能登町方面出発 8:00 輪島・穴水方面出発 9:45 国立能登青少年交流の家集合・出発 12:00 白山ろく少年自然の家到着 12:15 昼食（食堂） 13:00 出会いのつどい 13:30 タンデムサイクリング 17:00 夕食（ニコニコバーベキュー） 19:00 ロープワーク 20:30 入浴 21:15 1日の振り返り 22:00 就寝準備、消灯	6:00 起床 6:30 朝のつどい 7:00 清掃 7:30 朝食(食堂) 9:00 自然の家出発 登山【三方岩岳】出発 山頂にて昼食 15:30 自然の家到着 キャンドルサービス出し物練習 17:00 夕食(食堂) キャンドルサービス準備 19:00 キャンドルセレモニー 20:30 入浴 21:30 1日の振り返り 22:00 就寝準備、消灯
3日目	
6:00 起床 6:30 朝のつどい 7:00 清掃 7:30 朝食(食堂) 8:30 宿舎点検 9:00 炎の野外炊飯【カレーライス作り】 11:45 昼食・後片付け 13:00 別れのつどい 13:30 白山ろく少年自然の家出発 15:30 国立能登青少年交流の家到着 17:30 輪島・穴水方面解散 18:30 能登町・珠洲方面解散	

5　アンケート分析と参加した子どもたちの声

（1）活動プログラムの実際

①白山ろく少年自然の家を舞台に３日間過ごすキャンプであった。そのため能登半島から参加する子どもたちにとってはバスによる移動距離が長くなったが、バス内で子どもたち同士が話したり、歌を歌ったりしてリラックスしている様子であった。

②ボランティアが 10 名参加したが、今回のキャンプは班付ではなく全体支援という形として参加した。その中で、特に安全への意識を持って、子どもたちの間に入り活動を支援した。

③天候が不安定であり、実施するか雨天プログラムにするかの判断が難しかったが、安全管理体制を整えた上で日中は予定している活動プログラムで実施することができた。しかし、キャンプ実施前に、施設周辺で熊の出没情報があったため、夜の活動は屋内での活動に変更した。

（2）アンケート結果について（具体的なエピソードも記入）

①事業の満足度は、37 名中全員が「満足」という評価であった。また、全員がリフレッシュできたという回答であり、事業全体を通して高い評価を得ることができた。「初めてのことにたくさん挑戦できたし、思い出にもなった」「たくさんの人と友達になれて、班のみんなとも協力できた。同じ部屋の人とも仲良く準備をしたり話をしたりできた」という声が多くあり、３日間の活動や生活を通して、仲が深まり、コミュニケーションも図れたことが伺えた。

②「家と遠く離れたところで泊まるのは初めてなので、すごくドキドキしました。特に山登りはみんなで一生懸命登ってお腹が空いていたので、ご飯がおいしかったです。このような行事にもっと参加してみたいです」「今度も２泊３日の時は行きたいです。そして、もっと友達を増やしたいし、次は星の観察や月の観察とか肝試し、キャンプファイヤもしたいです。もっともっと遊びたかったです。また来たいです」というような意見もあり、意欲や関心が深まった様子が感じられた。

6　成果と課題

①成果

・スタッフやボランティアも多く確保できたため、安全への配慮（サイクリングの交通管理、登山の隊列）を徹底して、活動を実施することができた。

②課題

・石川県との共同事業ということで、担当者間の打合せや役割分担等が明確にできておらず、活動の進行等に遅れが生じたことがあった。複数の施設職員が担当する上で情報の共有が難しい部分はあるが、オンライン等を活用して事前に打合せをすることが望ましい。

令和7年度　石川県×国能青　共同事業　がんばろう　能登っ子！自然学校
リフレッシュ冬キャンプ

1　趣　旨

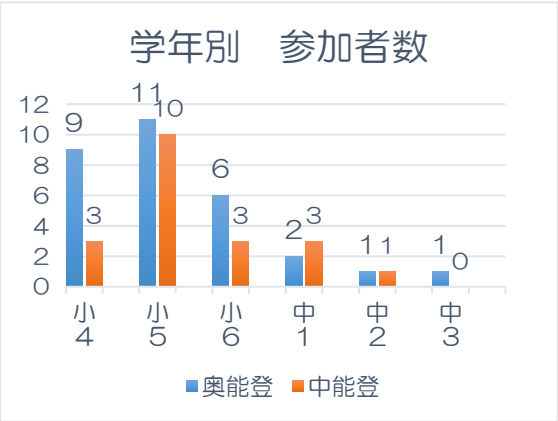
・令和6年能登半島地震により被災した児童・生徒に、冬の白山麓での自然体験の機会を提供し、児童・生徒の心の復興を図る。

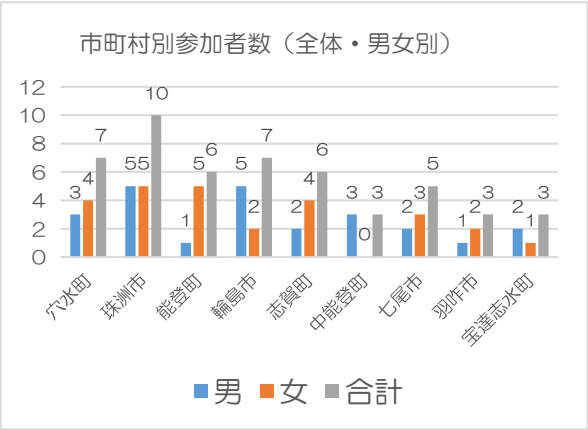
2　実施期間　令和8年2月 21 日（土）～ 23 日（月・祝） 2泊3日

3　参加者

（1）参加者　　能登地区在住の小学校4年生～中学校3年生　39 名、ボランティア 10 名
（申込 110 名　当日欠席 11 名）

（2）地区別参加者（当日欠席者含む）





4　活動内容

1日目	2日目
7:00　珠洲・能登町方面出発 8:00　輪島・穴水方面出発 9:45　国立能登青少年交流の家集合・出発 11:20　自然史資料館　着 11:30　開校式 11:45　昼食（弁当） 12:30　3D万華鏡づくり、館内展示解説 15:00　自然史資料館　発 16:00　白山青年の家　着 オリエンテーション、ベッドメーキング等 18:00　夕食（食堂） 19:00　スキー活動について 活動後、入浴 22:00　就寝準備、消灯	6:30　起床・洗面・部屋整頓 7:00　清掃 7:30　朝食（食堂） 8:30　スキー活動の服装・持ち物チェック 8:45　青年の家　発 9:45　スキー活動（白山一里野温泉スキー場） 11:45　昼食(弁当) 13:00　スキー活動 15:30　白山一里野温泉スキー場　発 16:30　白山青年の家　着 のんびりタイム 18:00　夕食（食堂） 19:00　キャンドルセレモニー 20:30　入浴 21:30　振り返り・翌日の準備 22:00　就寝準備、消灯
3日目	
6:30　起床 7:00　清掃 7:15　朝食(食堂) 7:45　宿舎点検、荷物移動 8:30　白山青年自然の家　発 9:30　白山中宮温泉スキー場　着 9:40　雪滑り遊び（チューブ滑り、エアボード） 11:30　白山中宮温泉スキー場　発 12:30　白山青年の家　着、着替え 12:40　昼食 13:30　アンケート 13:45　閉校式 14:00　白山青年の家　発 15:45　国立能登青少年交流の家到着 17:30　輪島・穴水方面解散 18:30　能登町・珠洲方面解散	

5　アンケート分析と参加した子どもたちの声

（1）活動プログラムの実際

①2日目にスキー、3日目に雪滑り遊びの活動を行った。スキー未経験の参加者が大半だったが、活動の様子やアンケート結果から、白山麓の雪の活動を大いに楽しむ様子が見られた。スキー活動の前日に、スキー靴の履き方や道具の取り扱い方について事前指導を行うことで、参加者が安心し、安全に活動に取り組むことができた。

②金沢市にある「自然史資料館」での3D万華鏡づくりと展示見学は、能登地域在住の児童生徒にとって貴重な体験になった。万華鏡は家へのお土産になると喜ぶ声も聞かれた。

③施設設備のトラブルから、宿泊場所が「白山ろく少年自然の家」から「白山青年の家」に急遽変更になった。宿舎の調整やスキー場への移動時間の延長などの課題が生じたが、県立職員の配慮と連携のおかげで、活動に支障なく対応することができた。

（2）アンケート結果について（具体的なエピソードも記入）

①事業の満足度は、39名中全員が「満足」という評価であった。また、全員がリフレッシュできたという回答であり、事業全体を通して高い評価を得ることができた。「スキーやそりなどで自然を楽しめた。お風呂やキャンドルサービスなどで心もリフレッシュできた」「スキーは初めてだったけど、練習するごとに上達してうれしかった。今度は家族でも行きたい」「学校ではできないことも多かったので、とても楽しかったし、いい思い出ができた」などの感想が多かった。冬の白山麓の自然やウインタースポーツなど、能登地域の児童生徒が普段なかなかできない活動を体験し、満足感や達成感を得られたことが窺えた。

②「たくさんの友達ができて、前からの友達との仲ももっと深まった」「新しい友達ができてうれしかったし、ボランティアの人達とも仲良くできて楽しかった」という感想が大変多かった。中学生では、「1日目は一人のことが多くて、みんなと仲良くなれるか心配だったけど、活動を通して仲良くなれた子達と楽しめてうれしかった」など、他者との関わりや気持ちの変化について振り返る記述も見られた。3日間のキャンプを通して、多くの参加者が仲間づくりや協力することのよさや楽しさを実感することができたと感じた。

6　成果と課題

①成果

・スタッフ、ボランティアが多く確保できたため、安全への配慮を徹底して活動を行うことができた。特にスキー活動では、1つの班（児童生徒3～5名）にスタッフ、ボランティア、インストラクター各1名が付いて活動できたことが、スキー初心者の参加者の安心感につながったと考える。

②課題

・自然史資料館での開校式と個々に作成する「3D万華鏡づくり」からスタートしたため、キャンプの最初に参加者同士やボランティアが打ち解ける時間を設定することができなかった。移動時間等の制約もあるが、キャンプのスタート時には仲間づくりの活動を設定することで、参加者の気持ちがほぐれ、安心感を高めることができると考える。

全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」

令和7年度教育事業

全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」

「 オリエンテーション合 宿 in 能 登チャレンジ」

全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」とは

国立青少年教育振興機構が令和2年度に新設した「全国高校生体験活動顕彰制度『地域探究プログラム』」は、高校生の体験活動を通じた成長を目指し、改訂された学習指導要領のキーワードである「探究」の手法を用いて学習を深める制度である。取組みを段階的に分けており、ステップⅠ「地域探究トライアル」では「探究」の学びと実践を、そしてステップⅡ「地域探究アワード」では意欲の高い高校生向けに実践活動の顕彰を行う。

1 趣 旨

高校生が地域づくりや地域の課題解決などに関する体験活動を通して、問題発見・解決能力を身に付け、新たな価値を創造する人材育成に資するとともに、それぞれの実践活動の成果や自身の成長を適切に評価し、青少年の体験活動に関わる社会的な認知を高める。

2 日 程 等

(1)期 日　令和7年7月 19 日(土)～7月 21 日(月祝) 2泊3日

(2)参加者

石川県立大聖寺高等学校	第3学年 2名	
石川県立鶴来高等学校	第2学年 2名	
金沢高等学校	第3学年 1名	第1学年 1名
金沢大学人間社会学域 学校教育学類附属高等学校	第2学年 1名	第1学年 3名 合計10名

(3)講師及び研修内容

① 講 師

[講話「みずからで守り繋ぐ私たちの地域づくりの実践 あなたが考える地域づくり 地域の課題とは」]

羽咋市邑知公民館神子原分館 館長 平井 正信 氏

[フィールドワーク①・②]

有機農家　屋後 浩幸 氏

元菅池町 町会長　中山 勇晴 氏

[講義・演習②]

富山大学経済学部1年 秋葉 詩音 氏

[ガイダンス、講義・演習①、③④、発表①②]

魚川 友康(国立能登青少年交流の家 企画指導専門職)

須田 寛子(国立能登青少年交流の家 企画指導専門職)

3 成果と課題

本事業に参加した 10 名の生徒から、今回のオリエンテーション合宿での学びについての振り返りをしてもらった。

（1）フィールドワークでの学びについて（生徒の感想・記述より抜粋）

・町の人の話を聞くことがいかに重要か分かった。もっと農業について深く知りたくなった。

・実際に農地に行ってみることによって視野が広がった。農業だけでなく、生産や経営についての話が面白かった。

「有機野菜」と「のとしし」を使ったカレー作り

（2）生徒のオリエンテーション合宿の学びにおける成果と課題
（生徒からの聞き取り）

① 成果

・参加しなければ分からなかったことがたくさんあった。農家の方々の生の声を直接聞いたことで、現場のリアルな課題や思いを知ることができた。また、他校の生徒の多様な視点からの意見や質問にも触れ、自分の視野を広げることができた。

・初めてのプレゼンを通して、解決策を考える際にはメリット・デメリットの両面から整理すると分かりやすいこと、そして問題点を指摘するだけでなく、それをどう改善していくかまで考えることが大切だと学んだ。

フィールドワーク②の後の集合

・自分の将来を見つめ直すきっかけになり、一歩近づいたように感じた。屋後さんとのつながりができたので、これからも学びを深めていきたい。

・農業に関するさまざまな知識を得たことで、祖父母の畑仕事を手伝ってみようという気持ちになった。

② 課題

・フィールドワークでは農業体験のため屋外活動を行ったが、ちょうど梅雨明けと重なり、非常に暑い日となった。熱中症のリスクもあったため、今後は活動内容に応じて開催時期を検討する必要があると考えられる。

・フィールドワークの時間が限られていたため、収穫体験の時間が十分に確保できなかった。

発表・質疑応答

（3）運営面における成果と課題

① 成果

・募集時にチラシを工夫して作成し、農業への関心を引くよう配慮した結果、10 名の参加者を得ることができた。

・昨年度の参加実績のある高校を訪問し、今年度の事業を説明した結果、2 名の参加が得られた。・テーマ設定が良かったのか、これまで参加実績のない高校の生徒も参加し、有意義な時間を過ごすことができた。

・参加前に高校生に「参加動機」をフォームで聞いたことで、参加者の思いや関心を講師と共有でき、講義やフィールドワークの内容を構成する材料にすることができた。

・1 日目の講義やフィールドワーク①ではやや緊張感があったが、「夕べのつどい」やその後の交流活動を通じて一気に打ち解け、以降の講義・演習では活発に意見交換ができた。

・地域探究プログラム（公募型）の経験者である大学生をアドバイザーとして招いたことで、テーマ設定や探究の進め方、解決へのアプローチなど実践的なアドバイスを受けより深い学びにつながった。

・事業全体の満足度は 100%で、「多様な見方・考え方に気づけた」「まとめ・表現する力が伸びた」との声が多く寄せられた。

② 課題

・地域探究プログラムの計画・立案が年度途中からの着手となり、スケジュールがタイトになってしまった。その結果、関係者に負担をかける形となった。

・予算に限りがある中で、遠方から参加する生徒には交通費や食費の負担が大きく、参加料7,000円は高額と感じられた可能性がある。今後は参加料に見合ったプログラム構成を検討する必要がある。

令和7年度教育事業

全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」

「地域探究オリエンテーション合宿　羽咋高校 地域探究トライアルキャンプ」

全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」とは

国立青少年教育振興機構が令和2年度に新設した「全国高校生体験活動顕彰制度『地域探究プログラム』」は、高校生の体験活動を通じた成長を目指し、改訂された学習指導要領のキーワードである「探究」の手法を用いて学習を深める制度である。取組みを段階的に分けており、ステップⅠ「地域探究トライアル」では「探究」の学びと実践を、そしてステップⅡ「地域探究アワード」では意欲の高い高校生向けに実践活動の顕彰を行う。

1 趣 旨

羽咋高校第1学年生徒が、羽咋市を中心とする地域社会づくりや地域が抱える課題解決などに関するフィールドワーク（FW）を通して、課題発見・解決能力の基礎を身に付け、今後の探究活動に活かすとともに、地域や社会の将来を担う人材の育成を図ることを目的とする。

2 日 程 等

（1）期 日

① 令和7年7月 28 日（月）～7月 29 日（火） 1泊2日
・羽咋高校 前半 66 名

② 令和7年7月 30 日（水）～7月 31 日（木） 1泊2日
・羽咋高校 後半 86 名

（2）講師及び研修内容

○幸福観想コース	たきのーほーむ風和里 羽咋高齢事業部長兼管理者	森川 みなこ 氏
	千里浜町総区長サロンおっちゃ家代表	冨山 一夫 氏
○自然共生コース	羽咋市役所総務部まちづくり課長	崎田 智之 氏
	石川県希少種保全推進員	西屋 馨 氏
○文化伝承コース	羽咋市歴史民俗資料館 学芸員	中野 知幸 氏
	菅池獅子舞保存会	横山 孝信 氏
	はくい獅子舞保存活性化実行委員会	諏訪 雄士 氏
○交流創出コース	羽咋市役所総務課まちづくり課係長	松岡 正樹 氏
○健康躍動コース	石川県立看護大学教授	垣花 渉 氏
○歴史国宝コース	妙成寺執事	大森 教生 氏
	羽咋市歴史民俗資料館	中野 知幸 氏
○防災減災コース	石川県防災活動アドバイザー	松井 喜憲 氏
	内灘町町会区長会副会長 宮坂区長	坪内 健一 氏
	羽咋市柳田町眉丈団地	釜谷 外和 氏
		古瀬 巌 氏

3 成果と課題

本事業に参加した生徒から、事業での学び等について事後アンケートを行った。

（1）トライアルキャンプでの学びについて（生徒の記述より一部抜粋）

・現状から自分たちで問いを立てて、その原因を考え、解決策を出すというのを何回もやったことにより、自分たちだけで問題を立てて解くということがより意味の深いものになった。
・FW を通して地震の恐ろしさやその防災のために心がけるべきことを被災者本人の生の声を通して知ることができた。このような経験は、貴重なものだし、だからこそ活動に積極的に参加できて、たくさんのことを学べたと思う。
・人と生き物が共生していくことの難しさを知れた。特に、いのしし問題では目的を失わず、活動を進めていく難しさに直面し、深く考えるきっかけになった。

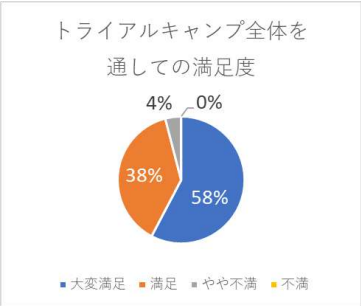
（2）今後取組みたいことについて（生徒の記述より一部抜粋）

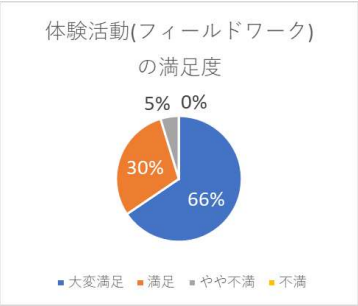
・私たちの住んでいる地域の問題点を解決するための力や、私たちの力でどれだけ問題を解決できるのかを考える力が付きました。また、価値観の違ういろんな人たちと、答えのない問いについて深めていきたい。
・今回のトライアルキャンプを通して、自分たち（高校生や小中学生）が話すだけで高齢者はとても喜んでくれると分かった。自分自身もそれが嬉しかったので、このコースではなかった人や、高齢者との関わりが少ない人にも、福祉に関わり、元気を届けることが出来ることを体験したり伝えたりできるのだと知らせたい。
・海にいる生き物がのびのび暮らせるようにゴミなどを減らす活動に取り組みたい。

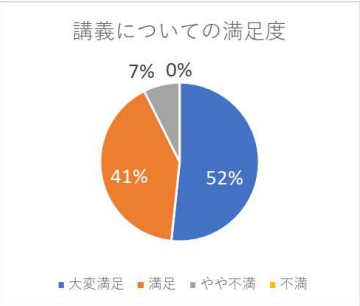
（3）事業における成果と課題

① 成果

・羽咋高校の探究学習担当教員と連携を密にとり、細かな打合せにも参加してもらうことで講師と教員が事業のねらいを共有するとともに、生徒のより主体的な学びにつながった。
・R6 の成果・課題を活かして R7 は「自分ごと」をキーワードに展開したことも良かった。
・交流の家バス1台と羽咋高校バス2台で FW 先を移動した。天候にも恵まれ、予定通り実施することができた。軽微な変更については、その都度、本キャンプに携わる全ての教員と当施設の担当者でリアルタイムに共有して対応できた。







② 課題

・移動に関わる運転手、交通手段の継続的な確保が必要である。担当教員と輸送計画を立案し、充実した FW を展開できるようにしたい。

令和7年度 教育事業
全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」
「能登ステージ」～高校生交流会～

1 趣 旨

地域探究プログラムオリエンテーション合宿での学びを深めるとともに、他校の高校生同士が交流し、互いに刺激し合うことで、ものごとを探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力などを身に付けるきっかけとする。また、同年代の仲間を増やすことで、多様な価値観に触れ、人としての在り方を考えるなど、新たな価値を創造する高校生の育成を目的とする。

2 日程等

（1）期 日　　令和7年 12 月6日（土）～12 月7日（日） 1泊2日

（2）参加者　　石川県立鶴来高等学校　第2学年　2名
　　石川県立羽咋高等学校　第2学年　16名
　　金沢高等学校　第1学年　1名　合計 19 名

（3）協力団体　一般社団法人 まるオフィス

（4）日程及び研修内容

12 月6日（土）		12 月7日（日）	
13:15	集合・受付	6:00	起床・洗面・着替え
13:30	開講式	6:30	清掃
13:40	アイスブレイク NOTO ジョイフレンド	7:00	朝のつどい
15:30	① わたしの探究 語りタイム	7:20	朝食
	～思いを伝える わたしの探究～	8:30	宿舎点検・荷物移動
17:45	ふとんメイキング	9:00	④ わたしの探究 伝えタイム
18:15	夕食づくり（鍋）		～昨日より今日のわたし～
19:30	② わたしの探究 深めタイム	12:30	昼食
	～カタリバ探究 車座トーク～	13:15	振り返り・事務連絡
21:00	入浴	13:45	閉講式・解散
22:00	③ なかまといろいろ しゃべりタイム		
23:00	就寝準備・就寝		

3 成果と課題

（1）活動プログラムの実際

①参加者が自ら取り組んでいる探究活動を発表し、参加者同士が初発の感想を伝えたり、質問したりすることで、より相手意識をもって伝えることへの意識づけを行った。

②宮城県気仙沼市を拠点に探究活動を行っている（一社）まるオフィスの職員の方にオンデマンド配信で参加していただいた。参加者の探究活動での悩みや不安等についての助言、探究活動についてのメッセージをいただいたことで、発表の見通しと探究活動を進めることへの自信につなげた。

③1日目を振り返って学びを整理したり、学校やテーマ、個人・グループの垣根を超えて交流を深めたりすることで、協働性と同僚性を高められるようにした。

④授業分析ソフト S-T 分析をカスタマイズしたものを企画指導専門職が活用し、個々の参加者の発表を分析した。分析後、速やかにフィードバックを行い、前日に学んだことを生かして、発表原稿を作成した。また、発表後は、参加者が互いの発表について、発表評価シート（マイクロフォーム）で相

互評価するとともに、良い点及び改善点を口頭で伝え合った。これらの手だてにより、発表者が自らの発表内容や論の立て方等の傾向を視覚的に捉え、相手に効果的に伝える内容を検討し、改善する一助となるようにした。

（2）アンケート結果について

能登ステージ全体の満足度（満足89.5% やや満足10.5%）、「わたしの探究 語りタイム」（満足94.7% やや満足5.3%）、「わたしの探究 深めタイム」（満足78.9% やや満足21.1%）、「なかまといろいろしゃべりタイム」（満足94.7% やや満足5.3%）、「わたしの探究 伝えタイム」（満足84.2% やや満足10.5% やや不満5.3%）であった。

① OR 合宿での学びを活かして自分から挑戦し、探究をすることで探究の魅力をさらに実感できた。
② 学校では気付かなかった課題が多く見つかりとても充実した。また、他校の生徒からも刺激を受け、がんばる活力がより生まれた。
③ 初めて話す仲間とこの能登ステージを終え、終わったあとの達成感がすごかった。
④ 他のグループの成果や改善点を考えることは、ひいては自分を客観視することにつながった。
⑤ まるオフィスの方から「一言しか伝えられないとすれば何を伝えたいか」と問われたとき、自分たちの探究の原点や妙成寺への思いを改めて確認することができた。
⑥ 最初は気が張っていたけど、交流を深めるにつれて楽しくなり、リラックスして過ごすことができた。

（3）成果と課題

①成果

・高校生同士の交流によって学びを深められるよう、企画指導専門職がコーディネートすることによって、学び合いが活性化し、発表の質の高まりがどの個人・グループにも顕著に認められた。
・夕食づくりや夜の交流タイムでは、学校や学年、男女の垣根を取り払って活動したことで、交流がより深まり、2日目には多くの生徒が質問・提案する姿につながった。
・発表動画での検証、データ分析、参加者による相互評価と、多視点から主観的かつ客観的なエビデンスを用いたことで、各自が納得感を得ながら、ぞれぞれの課題を洗い出すことにつなげていた。

②課題

・探究活動の実践活動そのものが少ない生徒は、現状や課題等についての発表内容の割合が多くなる。そのため、探究活動において、「実践」から見える自分の考えを再構成したり、見出したりすることができるよう、学校の探究担当者や支援者へ、生徒への助言を依頼する必要がある。

4 事業の様子

【夕食づくり（鍋）】

【講座④ わたしの探究 伝えタイム】

令和7年度 教育事業
「NOTO サマーキャンプ」

1 趣旨（目的）

ひとり親家庭の子供たちが、野外での自然体験活動や集団宿泊活動を通して、自己肯定感を高め、互いに協力し合うコミュニケーション能力を育む。

また、交流の家で施設の使い方のルールを守ることを通して、基本的な生活習慣や公共マナーを身に付け、社会に出るときに役立つ力を養う。

2 日程等

（1）期日　　令和7年8月4日（月）～ 6日（水） 2泊3日

（2）参加者　小学校4～6年生 23名

（4年生：男子4名、女子0名 5年生：男子8名、女子3名 6年生：男子1名、女子7名）

（3）協力団体 笑顔のこども食堂ネットワーク －GOHAN－

（4）活動内容

8月4日（月）	8月5日（火）
8:00 子ども食堂出発 10:30 出会いのつどい、入所オリエンテーション 11:20 NOTO ジョイフレンド 12:30 昼食 13:30 砂像造り、磯遊び 17:00 夕べのつどい 17:35 夕食 19:00 マイフォーク作り 20:30 入浴 21:30 1日の振り返り 22:00 就寝準備、消灯	6:00 起床 7:00 朝のつどい 7:35 朝食 9:00 野外炊事（ピザ作り） 13:30 アーチェリー 16:00 のんびりタイム（かき氷） 17:30 夕食 19:00 キャンドルセレモニー 20:30 入浴 21:30 1日の振り返り 22:00 就寝準備、消灯
8月6日（水）	
6:00 起床 7:00 朝のつどい 7:20 朝食 8:40 宿舎点検 9:00 貝殻アート（写真立て） 11:00 またねのつどい 11:40 昼食 12:30 退所式 13:30 コスモアイル羽咋 見学 15:00 コスモアイル羽咋 出発 17:00 子ども食堂到着、解散	

3 成果と課題

（1）活動プログラムの実際

①初参加に不安を抱える子どももいたが、NOTO ジョイフレンドや海での活動、宿舎で過ごす時間等を通して、1日目から打ち解ける様子が見られた。

②参加者に夏らしい思い出を作ってあげたいという思いから、砂像造りと磯遊びを行った。1日目に設定したことで、班の仲間と協力する意欲や雰囲気を高め、2日目以降の活動につなげることができた。

（2）アンケート結果について（具体的なエピソードも記入）

①事業の満足度は、23 名中22名が「満足」、1名が「やや満足」という評価であった。事業全体を通して高い評価を得ることができた。「たくさんの友達ができた。来年もまた絶対来たい」「3年連続でサマーキャンプに参加することで、友達が増えたし、行動力や話す力が付いた」など、仲間とのかかわりや自分自身の成長を振り返る記述が多く見られた。

②「海遊びやピザ作り、キャンドルセレモニーなど、初めての経験がいっぱいできた」という振り返りや、「写真で初めて海に入る姿を見てびっくりした」という保護者の感想が寄せられた。普段の生活では体験できない活動を提供することができた。

（3）成果と課題

①成果

・参加者のことをよく知る子ども食堂のスタッフと打ち合わせを重ねたことで、全員が参加し、楽しめる活動を設定することができた。また、事業当日においても、日常と異なる環境で初めてのことに挑戦する上で、子ども食堂のスタッフの存在は子どもたちの安心感につながった。

・8月上旬の開催であったが、屋外と屋内の活動をバランスよく配置したり、余裕をもたせたプログラムを設定したりすることで、熱中症や怪我が起きることなく活動することができた。

②課題

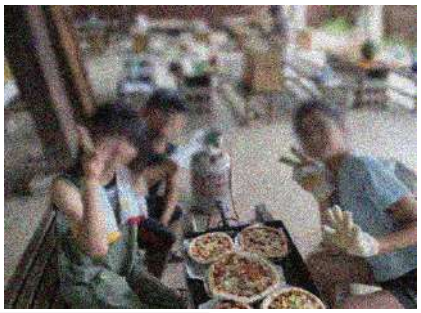
・本事業が、どの参加者にとっても心の成長につながる機会になるよう、子ども同士のかかわりへの適切な対応や指導について、団体スタッフと施設職員で事前に方針を相談し、共有しておく必要性を感じた。

4 事業の様子

【NOTOジョイフレンド】

【砂像造り】

【磯遊び】



【野外炊事～ピザ作り～】

【アーチェリー】

【のんびりタイム～かき氷～】

【キャンドルセレモニー】

【貝殻アート】

令和７年度 親子でつくろう体験の和実行委員会

「ファミリーで美しい能登の海へ！ヨットセーリングキャンプ」

１ 趣 旨

・ヨットの基礎知識や技能を学び、ヨットの操縦を体験することで能登の海に親しむ。
・海での活動を通して、自然体験に関心を持つきっかけを与える。
・家族で一緒に体験活動をすることで、親子の絆を深めるとともに協働性を高める。

２ 日 程 等

（1）期　　日　令和７年８月 30 日（土）～31 日（日） 1泊2日
（2）参 加 者　小学校3年生以上の児童を含む家族　7家族 24 名
（3）活動内容

8月30日（土）		8月31日（日）	
8:30～8:50	集合・受付	6:00～7:00	起床、清掃
8:50～9:30	滝港マリーナへ移動・はじめの会	7:00～7:20	朝のつどい
9:30～12:00	ヨット体験・海遊び（滝港海岸広場）	7:20～8:00	朝食（食堂）
12:00～13:30	昼食（注文弁当）・休憩	8:00～9:00	宿舎点検・荷物移動
13:30～16:00	ヨット体験・海遊び（滝港海岸広場）	9:00～13:00	野外炊事「かまどご飯・豚汁」
16:00～16:30	交流の家へ移動	13:00～13:30	2日間の振り返り・おわりの会
16:30～17:45	入室・入浴	13:30～	解散
17:45～19:00	夕食（食堂）・休憩		
19:00～21:00	たき火・花火		
21:00～	就寝準備・消灯		

３ 成果と課題

（1）アンケート結果からの成果

①事業の満足度は、参加した22名が「とても楽しかった」2名がまあまあ楽しかったと回答し事業全体は高い評価を得ることができた。

②ヨット・海遊びの感想では、「初めてヨットに乗って楽しかった」「普段できない体験ができてよかった」「いろいろな貝を見つけられておもしろかった」という記述が多く見られた。また、「高校生たちが優しく教えてくれた」という記述もあり、普段できないヨットの操縦に加え、高校生との交流も参加者にとって良い経験になったことがわかる。

③たき火の感想では、「マシュマロがおいしかった」「ゲームが楽しかった」という感想が多かった。

④野外炊事の感想では、「かまどご飯が新聞紙で美味しく炊けて良かった」「役割分担ができてよかった」という記述があった。新聞紙で炊くご飯や豚汁の調理に、親子で楽しそうに取り組む姿が見られた。

⑤キャンプを通しての子どもの変化については、「兄弟で協力する姿を見られてよかった」「家ではしない料理を進んでお手伝いしてくれた」「ケンカばかりの兄弟が積極的に準備や片付けをしいて張り切っていた」「成長を感じた」という記述が見られた。いつもと異なる生活環境で過ごしたことが子どもの成長に繋がり、保護者も子どもの新たな一面に気づくことができたため、家族にとって有意義な時間となった。

（2）事業を通しての成果と課題

①１日目の海活動では、熱中症等になった際の休憩場所として滝港マリーナ管理棟の会議室を想定していた。会議室には冷房がついていないため、体を冷やせるよう保冷剤や飲料、救急セット等を準備した。海岸広場の駐車場に公用車を常駐させ、すぐに対応できるよう努めた。今回は体調不良者も出ず無事に活動を終えることができたが、次年度以降も熱中症対策を徹底して活動に臨む必要がある。

②夜は、かんぽラジオ体操広場でたき火を実施、レクリエーションで参加者同士のふれあいが深まった。

③今年度はボランティアの参加があり、海遊びの時間や、レクリエーションや声掛けなど子どもと多く触れ合う時間があり、参加者も満足していた。

4 事業の様子

国立能登青少年交流の家

令和7年度 親子でつくろう体験の和実行委員会
「Smile Festival」
～NOTO に最幸の笑顔を～

1 趣旨（目的） 来場される能登の方が笑顔で過ごす日になることを目的とし実施する。様々なブースでの体験を通して、自分の手で作る喜びや体を動かす楽しさなどを感じ、豊かな心情を育てる。また、参加者が主体的に活動に取り組み体験したことを私生活で活かす一助となるよう工夫し、体験活動への理解を深める。

2 日程等

（1）期　　日　令和7年 10 月 18 日（土）

（2）参 加 者　来場者 413 人 出展・協力者 84 人　計 497 人

（3）協力団体　【ステージ発表】
石川県立輪島高等学校和太鼓部、羽咋ジュニア吹奏楽団、羽咋 JR.リズムダンス、能登きらきら KIDS

【飲食・物販】
壺焼き芋青空、カフェ珈琲ボランチ号、羽咋市地域おこし協力隊+Friend、夢生民、焼き処のりちゃん、Niche coffee、地球知足、風和里、災害支援団体 SILBERN、道の駅すずなり、海遊能登の庄

【体験】
中村屋、北陸モバイルプラネタリウム、いしかわ絵本専門士の会トライアングル、バルーンのぶんちゃん、etc.works、タイガー魔法瓶、ソニー生命株式会社、石川県立田鶴浜高等学校、砺波青少年自然の家、国立乗鞍青少年自然の家

（4）活動内容

10 月 18 日（土）
10:00 開始 （体験・飲食・物販ブース）
10:30 ステージ発表①輪島高校和太鼓部
11:10 ステージ発表②羽咋ジュニア吹奏楽団
11:30 食堂オープン
13:15 ステージ発表③羽咋 JR.リズムダンス
14:00 ステージ発表④能登きらきら KIDS
15:00 終了

3 成果と課題

（1）活動プログラムの実際

①今年は、「笑顔」をテーマに実施した。能登を元気にすること、地域を応援することを目標に、出展・協力者を、地域の方々と能登地域で活動する方々をお招きした。また、昨年度もイベントに出展していただいた方々もお招きし、イベントを盛り上げることができた。

②ステージ発表では、昨年も発表していただいた方々を中心にお招きし、今年度新たに輪島高校の和太鼓部さんに演奏をお願いした。演奏したり、踊ったりと子どもたちの元気で会場を盛り上げることができた。また、発表の場を提供することができた。

③今年は、事業運営の補助以外にも、ボランティアの自主企画としてひとつのブース展開し、計 13 名のボランティア参加があった。

（2）アンケート結果について

①アンケートから、「とても楽しかったのでまた開催してほしい」、「雰囲気が良く楽しめた」、「親子で楽しめた」、「大人だけでも楽しめた」などの声があった。大人から子どもまで、笑顔でイベントを楽しんでいる姿が多く見られた。また、作った作品を両手いっぱいに抱え、笑顔で「まだ帰りたくない！」とイベントを楽しむ子どもの姿も見られた。

②イベント参加者から、「昨年もこのイベントに参加して楽しかったので、今年も家族で来た」、「前回、別の事業に参加して能登が好きになり、また遊びに来た」などの声をいただいた。Smile Festival を通して、国立能登青少年交流の家が地域の方々にとって身近で親しみのある施設として認知されるようになってきた。

（3）成果と課題

①成果

・出展者からも「楽しいイベントに参加できてよかった」、「是非、また来年も参加したい」などの声があり、イベント全体の満足度が高かった。

・イベント途中、雨に降られたが、荒天時にも対応できるように屋外の準備をしていたため、大きな混乱なく、イベントを継続することができた。

・自主企画ボランティア以外に、事業運営ボランティアも多くいたため、当日はスムーズな運営と参加者のサポートを中心に取り組むことができた。

②課題

・ステージ発表、体験ブース等の時間に重なりがあり、特にイベント開始後のステージ発表は十分に集客ができなかった。来年度は、オープニングセレモニーでの演奏発表や、イベントの開始時間と飲食ブースの販売開始時間をずらしたり、ステージ発表の時間は体験コーナーを休憩したりするなど工夫が必要である。

・広報はイベント実施１か月前を目途にチラシを配布し、詳細は SNS にて掲載をしていた。チラシによる広報に一定数の効果があったため、チラシの配布時期をもう少し早め、集客につなげたい。また地元広報誌や地域雑誌等への掲載について
も積極的に動きたい。

・体験ブースの実施場所である研修室とステージ発表の講堂、飲食・物販ブースが離れていた。人が少ないところは盛り上がりに欠ける部分があった。 荒天時に配慮しながら、メインステージを作る等、動線を踏まえて、会場を盛り上げる雰囲気を作る工夫が必要である。

・開催時期について、県内、隣県の秋イベントとの重なりや雨が多い季節であるということを踏まえると、開催時期を検討する必要があると感じた。参加者や出展者からも同様の声が上がっていた。

4 事業の様子

【受付】

【ステージ発表】

【屋外ブース】

【研修室前】

【体験ブース】

【講堂前・物販ブース】

令和7年度「親子でつくろう体験の和」実行委員会事業
「HAKUI キッズイングリッシュキャンプ」

1 趣 旨

仲間との英語を用いた体験活動を通して，楽しく音声や基本的な表現に慣れ親しむ。また，安心できる温かい環境の中で，自分の考えや気持ちを英語で表現し，積極的にコミュニケーションを図る素地となる能力の育成を図る。これらのことが自信となり，日常生活において主体的に英語でコミュニケーションを図ることにつなげることをねらいとする。

2 日程等

（1）**期日・参加者等 ※複数校で、5・6年生に分かれて合計 4 回実施**

参加校	期日	児童数	国際交流員・ALT
① 羽咋小・西北台小　６年生	９月　８日(月)	６５名	１１名・２名
② 羽咋小・西北台小　５年生	９月１６日(火)	７１名	１０名・２名
③ 粟ノ保小・瑞穂小・邑知小　６年生	９月２２日(月)	７１名	７名・２名
④ 粟ノ保小・瑞穂小・邑知小　５年生	９月２４日(水)	５７名	６名・２名

（2）協力団体　特定非営利法人 YOU-I

（3）活動内容 <5･6年生>

活動		
9:00	① Opening ceremony School Introduction（学校紹介）	
9:30	② 仲間づくり（自己紹介･アクティビティ）	≪NOTO ジョイフレンド≫
11:00	③ 英語で国際交流員のことを知ろう	≪English Point Game≫
12:00	④ 国際交流員とランチタイムをしよう	≪English Lunch Time≫
13:00	⑤ さまざまな外国のことを知ろう	≪English Festival≫
15:00	⑥ またねの会	≪See you Meeting≫

3 成果と課題

（1）活動プログラムの実際　　※丸数字は、2（3）の表における①～⑥とリンクしている

①Smile, Clear Voice, Big Voice を心掛け，内容が伝わるように Gesture をつけ，Eye Contact で相手意識を持ってプレゼンする姿が圧巻だった。クイズを取り入れたり、問い返しをしたりする等、対話的な場面が多く見られた。5年時には発表者でなかった児童が、6年時には多く発表していた。

②出会ったばかりの仲間、国際交流員と打ち解け合うアイスブレイクは、交流の家の職員が英語で展開した。自己紹介では、ビンゴカードを活用して英語で交流の時間をとった。これにより、子ども達は互いの名前を知り、互いのよさ，協力することのよさに気付いていった。

③班付の国際交流員に英語で尋ね、人柄や文化、世界の遊びを体験を通して理解したり、班の仲間と一緒に英語を使ったりするミッションによって、国際交流員から QR（1/4）チケットをもらえるようにした。これを4枚集めると、午後の English Festival の入場チケットとなる展開にしたことで、2班の仲間と協力する必要感を生み、英語で表現することへのチャレンジを促すことができた。

④食事中は、食材を英語で言ったり、おかわりを伝えたり、味を伝え合ったりして、国際交流員との会話を楽しみながら食事をとっている班も見られた。

⑤入場時は午前中の English Point Game でゲットした QR チケットを受付で読み込ませると、入館を歓迎する動画が流れる仕掛けにした。どの班もうれしそうにそれを眺め、足早にブースへと駆

けていった。午前中に班付だった国際交流員は、午後は遊びや文化、食に関するブース等を出展した。これにより、多くの国際交流員と交流を深めることができた。

(2) アンケート結果について　※丸数字は、2(3)の表における①～⑥とリンクしている

◎前年度から伸びを示した主な数値と自由記述(抜粋)

「キャンプを通しての自己成長の実感」　(肯定的回答85%　消極的回答15%)

「キャンプを通しての仲間づくりの大切さ」(肯定的回答97%　消極的回答　3%)

「自分から英語でコミュニケーション」　(肯定的回答87%　消極的回答13%)

「体験活動を通して仲間と協力すること」(肯定的回答94%　消極的回答　4%)の自由選択「どの体験活動で協力できたか」では、2(3)①が 35%、③が 69%、⑤が 66%という数値を示した。

「体験活動を通して自分から英語で表現」(肯定的回答80%　消極的回答20%)の自由選択「どの体験活動で自分から英語で表現できたか」では、①が 58.5%、③が 61.2%、⑤が 50%という数値を示した。

<5年生>

① 最初は英語が苦手だったけど、このキャンプで英語を使えるようになってうれしかった。

② 友達を作ることが苦手だったけど、初めての班でたくさんの友達を作ることができた。

③ 外国の祭りや文化が分かったし、おとなになったら外国へ行ってみたくなった。

<6年生>

① 外国の方の話を聴いて、分かる単語がたくさんあり、英語で尋ねられてもすぐ答えることができた。

② 聞き取れる英語がどんどん増えて、身近な英語をたくさん使い、上達するのを自分でも感じた。

③ これまで苦手だった前に出ての感想発表ができたので、今後も自信を持って発表していきたい。

(3) 成果と課題

①成果

・日頃から児童を理解しているALTが進行するスタイルにより、英語が苦手な児童に安心感が生まれた。また、国際交流員は、明瞭な英語をゆっくり繰り返して児童に伝えたことで、「英語を聴いて理解すること」(インプット)に自信を深めた児童が多くいた。

・「自己成長」「仲間づくりの大切さ」を実感する児童が、昨年度よりも増えた。特に、「自分から英語で伝えられた」と積極性を実感する児童が6年生で多く、昨年度からの積み上げが認められた。

・2(3)②、③、⑤と明確なゴールイメージを持ち、望ましい姿を共有できたことで、積極性が育まれた。午後の入場チケットが、自分達の積極性によって作り上げられるストーリーは、英語を話す、国際交流員や友達と交流する意欲を掻き立てていた。

②課題

・各クール担当教員同士で、児童個々の情報を伝え合って班編成したことは良かったが、英語のインプット、アウトプットの視点がさらに加わると、「自己成長」「積極性」をより実感すると考えられる。

・より児童の実態に即した展開となるよう、ALT との打合せを綿密に行うとともに、ねらいにそった展開の情報共有を、協力団体に依頼し、さらなる質の向上に努める。

4 事業の様子

仲間づくり
自己紹介

English Point Game

English Lunch Time

English Festival

羽咋市教育委員会連携事業・「親子でつくろう体験の和」実行委員会事業

「ヒノビィと一緒　通学合宿」
～仲間と一緒に生活習慣を身に付けよう～

1　趣旨

能登青少年交流の家での集団宿泊生活や生活体験活動を行いながら、普段の学校生活を送ることを通して、望ましい生活習慣や学習習慣を身に付けさせるとともに、社会性や協調性を育てる。

2　後援・協力

羽咋市教育委員会
宝達志水町教育委員会
志賀町教育委員会
中能登町教育委員会

3　対象

小学校 3～6 年生

4　参加校・参加人数

	学校名	期間（2 泊 3 日）	参加人数
1	宝達志水町立志桜小学校	11月10日（月）～12日（水）	27名
2	中能登町立鹿西小学校 中能登町立鳥屋小学校 中能登町立鹿島小学校	11月12日（水）～14日（金）	48名
3	羽咋市立邑知小学校	11月17日（月）～19日（水）	56名
4	羽咋市立瑞穂小学校 羽咋市立粟ノ保小学校	11月19日（水）～21日（金）	39名
5	羽咋市立羽咋小学校 羽咋市立西北台小学校	11月26日（水）～28日（金）	59名
6	志賀町立志賀小学校	12月　1日（月）～　3日（水）	47名
7	宝達志水町立押水小学校	12月　3日（水）～　5日（金）	25名
		合計	301名

5　日程（基本的な生活時間）

第1日目		第2日目		第3日目	
		6:00	起床・身支度・清掃	6:00	起床・身支度・清掃
		6:50	朝　食	6:50	朝　食
		7:25	バスで登校	7:25	バスで登校
		8:00	学校生活	8:00	学校生活
		16:15	バスで下校		
17:45	受　付		学習	放課後	学校から帰宅
18:00	出会いのつどい オリエンテーション	17:00	夕べのつどい 交流タイム		
18:30	夕　食	18:30	夕　食		
19:00	学習（宿題・自学）等	19:00	学習・自由時間		
20:00	入　浴	20:00	入　浴		
21:00	翌日の準備	21:00	翌日の準備		
21:30	就　寝	21:30	就　寝		

6 活動内容

○学習の様子

下校後は、参加者全員で集中して宿題や自主学習に取り組んだ。分からないところを教えてもらったり、友達と一緒に取り組むことによって勉強の意欲が湧いたりと課題に対して一生懸命に取り組んでいた。

○交流タイム（夕べのつどい含む）の様子

夕べのつどいでは、NOTO ジョイフレンドやパイプライン、焚き火体験など、初めて出会った班の仲間と親睦を深めた。また、自由時間の中で友達と遊ぶ場面を設け自己決定することを促した。これにより、次第に学校や学年、男女関係なく声をかけ合い、遊びの輪が広がるとともに、友達と翌日の遊びの約束をする姿も見られた。

○食事の様子

夕食・朝食は、バランスのよい食事を摂るように努めていた。また、食品ロスにならないように残さずに食べる姿や苦手な物もがんばって口にする姿が見られた。友達と一緒に食べることが楽しいようで、班だけでなく、気の合う仲間同士で食事をとる場面も設け、交流を深めた。後片付けでは、協力してテーブルをきれいにする姿も見られた。

○宿舎での様子

宿舎では、協力しながらベッドメイキングや掃除をした。宿舎割を縦割りにしたことで、上級生が下級生をリードして活動する姿や、下級生が上級生に対して「教えて」と分からないことを聞いたり、「ありがとう」とお礼を言ったりする姿が見られた。また、就寝時間、起床時間を守って生活しようとする意識が高く、早寝早起きの生活習慣の定着につなげることができた。

7 成果と課題

事業評価アンケートでは、総合的な満足度は「楽しかった」92.6%と前回の91.2%より 1.4%上回った。「やや楽しかった」も 7.0%となり、肯定的評価が99.6%となった。前回から楽しみにしていた児童も多く、意欲的に活動することができた。また、「仲間と協力できた」「ゲームやテレビがなくても、十分楽しいことが分かった」という感想が多くあった。仲間と集団生活を共にし、規則正しい生活を送り、学習に取り組み、余暇を過ごすことができたと言える。

来年度は、登校時間までの中で清掃の時間を十分にとり、体験活動を一層充実させたいため、休日を利用した木、金、土の日程で実施を考えている。また、来年度はリピーターだけでなく、新たに通学合宿に参加したいという児童が増えるように広報に力を入れていきたい。

令和7年度 教育事業
「のとボラ養成セミナー」
～やってみよう！さぁ「ワクワク」の始まりだ～

1 趣旨（目的）

ボランティア活動に必要な知識や技能の向上を図り、ボランティアとしての資質を高め、広く社会でボランティア活動に取り組める青年を育成する。

2 日程

（1）期日　　令和7年 5月 24日（土）～ 25日（日） 1泊2日
（2）参加者　　青少年教育に関心のある高校生以上 21名
（高校生：男子 2名、女子 1名 大学生：男子 8名、女子 10名）
（3）講師：　　講義「ボランティア活動の意義」
新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部 准教授　中野 充 氏
（4）活動内容

5月24日（土）		5月25日（日）	
9:30	受付	6:00	起床
10:00	開講式		身辺整理、清掃
10:15	講義「青少年教育施設の現状と運営」兼アイスブレイク	7:00	朝のつどい
		7:20	朝食
12:00	昼食	8:40	宿舎点検
13:00	講義「青少年教育」	9:00	講義「ボランティア活動の意義」
14:45	講義・実習「体験活動における基本的な安全管理」①	10:35	講義・実習「体験活動における基本的な安全管理」②
16:15	実習「初めての野外炊事（ボランティア活動の技術）」	12:30	昼食
		13:30	能登事業紹介・ボランティア制度の説明（青少年教育施設におけるボランティア活動）
20:15	交流タイム（青少年教育施設におけるボランティア活動）		
21:15	入浴	14:40	閉講式
22:30	就寝	14:50	解散

3 成果と課題

（1）参加者の声

①従来、消防署から指導者を派遣いただき救急救命法を行っていた『基本的な安全管理』を職員が行い、より実践的な内容で講習することができた。

② 「ボランティア活動の技術」では野外炊事を行った。『安全管理』のコマを前後に入れることで、実際の指導時での安全管理を考えてもらい、ボランティアとして事業に参加したことを想定して、参加者が意見交換をしながらより実践的に実施することができた。

（2）アンケート結果について

①教育事業アンケートの満足度（「満足」の評価）は、「事業全体」「事業プログラム内容」「職員の指導・助言」の3項目において100％の高評価であった。その中で、「とても満足」の最高評価は 3項目全て 90％を超えた。講義内容のアンケートについては 1 項目を除き、満足以上が100％であった。「ボランティア活動の意義」についての「とても満足」の評価は 38％であり、「やや満足」が48％、「やや不満」が14％であった。

②アンケートの記述には「今回の活動でより一層ボランティアに興味を持つことができたので、次は実践にうつしていきたいと思います。」「子どもと一緒に行うことを考えて学びながら参加できたのでとても、楽しく充実した 2 日間だった」「実際ののとぼらの方からいいお話を聞けて、活動が想像できて、良かったです！」という感想があった。グループワークなどの活動が多く、仲良くなれたなど人間関係を形成できたことがわかる意見が多く寄せられた。

（３）成果と課題

①成果

・今年度の広報では、大学へ出向き、直接広報に力を入れた。教育学専攻がある金沢大学と金沢学院大学では講義のはじめに時間をいただき、教育学部の1、2年生全員にチラシの配布と内容の説明をすることができた。また県内の 6 つの大学（石川県立看護大学、金沢大学、金沢学院大学、金沢星稜大学、北陸大学、北陸学院大学）には、全学生に事業案内文をメール配信していただいた。高校生への広報は、羽咋市以北の8つの高校にチラシの配布を依頼した。結果、高校生から 3 名、大学生から 18 名の応募があった。

・人数が 21 名と募集人数には及ばない人数であったが、その分、密度の濃い関わりが出来、参加者全体で一体感が生まれていた。

・昨年度から参加している高校生ボランティアからのつながりで 3 名の高校生が興味を持って参加してくれた。

②課題

・今回、大学に募集をかけたが大学側のニーズと合わず、参加者が思うように集まらないといったことがあった。大学側のニーズ調査を行い、養成セミナーへの積極的な参加を促してもらえるよう依頼を行う必要がある。

4 事業の様子

【青少年教育】

【安全管理】

【野外炊事】

【集合写真】

令和7年度 教育事業
「自然体験活動上級指導者（NEAL インストラクター）養成講習
社会教育施設職員ステップアップセミナー」

1 趣旨（目的）

全国体験活動指導者認定委員会が制定した「自然体験活動指導者養成カリキュラム」に則り、自然体験活動におけるプログラムの企画・実施者になるとともに自然体験活動指導者（NEAL リーダー）を指導する自然体験活動上級指導者（NEAL インストラクター）を養成する。また、社会教育に携わる施設職員に向けたステップアップセミナーとして研修の場を設ける。

2 日程等

（1）期　日　　令和7年 11 月1日（土）～11 月3日（月・祝） 2泊3日

（2）参加者　　4名（国立施設職員）

（3）講　師　　エトセトラワークス株式会社 尾塩 苑 氏
環境教育事務所ネイチャーブランドプランニング 代表 小川 将友 氏
国立若狭湾青少年自然の家・国立乗鞍青少年交流の家・国立立山青少年自然の家
各施設職員

（4）活動内容

11 月 1 日（土）	11 月2日（日）
9:50 開講式 10:00 ガイダンス 11:10 講義「学校教育における体験活動」 12:40 昼食（食堂） 13:40 講義「自然体験活動の指導」 17:00 実習「自然体験活動の技術」 夕食作り 20:30 入浴 22:00 就寝準備、消灯	6:00 起床 7:00 朝のつどい 7:30 朝食（食堂） 9:00 講義「自然体験活動の安全管理」 12:00 昼食（食堂） 13:00 講義「対象者理解」 16:15 講義「自然体験活動の特質」 18:00 夕食（食堂） 19:15 講義・実習「自然体験活動の企画運営」 20:45 入浴 22:00 就寝準備、消灯
11 月3日（月・祝）	
6:00 起床 7:00 朝のつどい 7:20 朝食 8:40 宿舎点検 9:00 講義・実習「自然体験活動の企画運営」 12:30 昼食（食堂） 13:30 講義・実習「自然体験活動の企画運営」 14:45 履修試験 15:30 閉講式・解散	

3 成果と課題

（1）活動プログラムの実際

①講習の目標（ゴール）は、企画を考えることであった。その企画で意識する指導、安全管理、特色等を講義・実習で学び、反映していくようなスタイルで講習を進めた。

②机上だけの講習ではなく、野外での演習を入れることで、「目で見て感じる」部分のリアリティがあったと感じる。

（2）アンケート結果について（具体的なエピソードも記入）

① 「自分の安全管理が不十分であることがわかった」という意見があったように、普段施設で指導にあたる職員が参加者であったが、今後の自分自身の課題として捉えられる機会となった。

②「学校教育の観点から学ぶことができた」「学校連携について考えていく必要がある」という意見があり、施設を利用する多くが学校団体であるため、その部分の重要性を認識できたと考える。

（3）成果と課題

①成果

・参加者は 4 名であったが、その分ペアでの意見交換や、一人一人の発表等を全体で共有し、評価することもできたので、じっくり学ぶことができたと感じた。

・同じブロック職員を研修の講師や活動支援として各施設に派遣要請をした。自分の経験を伝える、相手に向けて話をするということで、ブロック職員もいい刺激を受けることができた。

②課題

・参加者募集に苦労した。参加資格に関するハードルがあったため、社会教育施設職員の研修の場として参加してもらえるように幅を広げたが、反応はなかった。今後のNEALインストラクター養成講習自体をどのような位置で考えていくかは、機構本部も含め検討していく必要性がある。

4 事業の様子

【自然体験活動の技術】

【対象者理解】

【学校教育における体験活動】

【自然体験活動の企画・運営】

【自然体験活動の安全管理】

【参加者の皆さん】

令和7年度 教育事業
「スーパーヒノビィをゲットせよ！Smile ミッションラリー」

本事業は当機構が実施している『令和7年度 高校・大学生の体験活動支援の推進事業 自主企画事業支援プロジェクト』の一環として、当施設所属の法人ボランティアが企画立案し、『Smile Festival in NOTO～NOTO に最幸の笑顔を～』の1プログラムとして実施されたものです。

1 趣旨（目的）

来場者がボランティアや来場者同士の関わりを通して繋がりを築き、制作活動や交流などのミッションをやり遂げることで達成感を得るとともに、笑顔で楽しむ機会を提供する。

2 日程等

（1）期日　　令和7年10月 18 日（土） 日帰り
（2）参加者　『Smile Festival in NOTO～NOTO に最幸の笑顔を～』参加者 120 名
（3）活動内容

10 月 18 日（土）
8:40 ブース準備 10:00 イベント&ブース受付開始 ・全5個のミッションで構成されたミッションラリーを行う ①ボランティアを探し，じゃんけんをして勝つ ②館内に隠されたスーパーヒノビィ（施設マスコットキャラクター）を見つける ③ボランティアや他の来場者にサインをもらう ④オリジナル缶バッジを作る ⑤笑顔の木に花を咲かせる（自分が笑顔になる瞬間を書き，模造紙に貼り付け来場者全員でひとつの作品を作る） ・ミッションを全て達成した参加者にはスーパーヒノビィのステッカーを渡す 15:00 イベント終了・後片付け

3 成果と課題

（1）活動プログラムの実際

① ブースを利用した参加者のほとんどは年齢関係なく、企画の説明をよく聞き、缶バッジ作りを楽しんだり、法人ボランティアと笑顔でじゃんけんをしたりと各ミッションを楽しんでいる様子が見受けられた。また、全ミッションを達成した参加者は、景品を受け取り、喜んでいた。

② 子供の来場者 285 名のうち 120 名がプログラムに取り組んでいた。

（3）成果と課題

①成果

・ 参加者が缶バッジ作りを楽しんだり、法人ボランティアと笑顔でじゃんけんをしたりする様子が見られ、「笑顔で楽しむ機会を提供する」という部分は概ね達成されたといえる。

②課題

・ 時間の都合などで全ミッションを達成できなかった参加者がいた。「達成感を得る」という点において、不十分であった。時間が足りない参加者が出た場合の対応策を練る必要がある。

・ 知らない人との関わりに戸惑う参加者がいないようにするために一緒に来た人でもミッション達成というルール設定が、会場で新たに出会った他者との関わりの機会を減らすことになった。最後どうしても達成できない場合に提示するなどの工夫をする必要がある。

4 事業の様子

【事業検討の様子①】

【事業検討の様子②】

【事業検討の様子③】

【ミッションの様子①】

【ミッションの様子②】

令和7年度国立能登青少年交流の家利用状況

利用者数及び宿泊室稼働率

	第1四半期			第2四半期			第3四半期			第4四半期			年間合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
宿泊総利用者数	961	3,565	6,234	6,531	8,910	4,527	3,387	2,795	1,653	1,048	446	2,200	42,470
日帰り総利用者数	1,484	1,195	1,513	1,324	2,178	1,133	1,843	2,004	653	459	155	1,682	13,074
総利用者数	2,445	4,760	7,747	7,855	11,088	5,660	5,230	4,799	2,306	1,507	601	3,882	55,544
宿泊室稼働率（%）	9.6%	29.3%	43.9%	53.4%	69.1%	39.5%	38.4%	32.5%	29.6%	61.0%	26.2%	50.3%	41.3%

※2月までは確定値。3月は3月10日時点の見込み値。

令和7年度国立能登青少年交流の家アンケート数値

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
事前相談満足度	100.0%	87.5%	60.0%	77.8%	82.2%	84.6%	85%	78.6%	87.5%	100%	100%	100%	86.9%
リピート率	100%	85.2%	78.6%	86.7%	81.2%	88.9%	85%	84.0%	93.3%	100%	67%	100%	87.5%
宿泊プログラム満足度	100%	96%	82.2%	80.0%	82.9%	90.5%	100%	73%	100%	0%	0%	0%	90.2%
電話・メール対応	100%	96.3%	82.1%	93.3%	87.0%	97.2%	89%	92%	100.0%	100%	100%	100%	94.7%
窓口対応	100%	100%	92.9%	93.3%	91.3%	100.0%	89%	96%	93.3%	100%	100%	100%	96.3%

※2月までは確定値。3月は3月10日時点の見込み値。

あとがき

体験活動における「失敗から学ぶ」ことは、子どもたちの成長にとって非常に重要なプロセスであり、単なる結果の失敗ではなく「学びのチャンス」ととらえることができます。体験活動を通じて，「失敗」を恐れず『チャレンジ』する心構えを醸成することは，子どもたちの健全な成長と自己肯定感の向上にとって非常に重要であるといえます。

令和7年度も，教育事業や研修支援で多くのプログラムや研修に取り組みました。今年度を振り返ると，子どもたちは，日常生活では体験できない活動をする中で，多様な『チャレンジ』を試み，仲間との絆を深めるとともに，困難を乗り越える姿を見ることができました。このような姿を見ると，子どもたちの満足感や達成感を感じることができ，子どもたちは様々な経験から大きな「学び」を得たことが想像できます。各事業でご支援とご協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

今後も未来を担う青少年のために，有意義な体験活動や研修の場を提供できますように努力してまいりますので，ご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

令和8年3月

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立能登青少年交流の家 次長 北　豊

令和7年度 国立能登青少年交流の家 職員

所長	北見 靖直
次長	北　　豊
主任企画指導専門職	酒井 伸大
企画指導専門職	魚川 友康
	須田 寛子
主幹兼事業推進係長	
兼企画指導専門職	小泉　　滋
事業推進係	松本 範子
	成清 裕史
	髙橋 春菜
	齊藤 吉夫
	岩野 靖子
総務・管理係	橋　　知佳
	木下 沙耶香
	髙井 寛記

令和７年度 国立能登青少年交流の家事業報告書　*Do my best!*

■発　行　日　令和8年３月

■編集・発行者　独立行政法人　国立青少年教育振興機構 国立能登青少年交流の家
〒925-8530 石川県羽咋市柴垣町 14-5-6
TEL 0767-22-3121（代）　FAX 0767-22-3125